仙台市文化財調査報告書第222集

郡山遺跡

―― 第112次発掘調査報告書 ――

1997年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第222集

郡山遺跡

―― 第112次発掘調査報告書 ――

1997年3月

仙台市教育委員会

序　　文

日頃より文化財保護行政に多大のご協力をいただき誠に感謝にたえません。

仙台市内には原始の時代から近世に至るまで数多くの遺跡が存在し、古くより人々が生活をいとなみ文化を築き上げてきたことがうかがわれます。とりわけ、郡山遺跡は昭和54年以来継続的に範囲確認等の発掘調査が行われ、我が国最古の地方官衙、多賀城以前の国府と考えられる成果等、辺境とされてきた古代東北の歴史を見直すような発見があいついでいます。

しかし郡山地区のみならず、市周辺地域は急速な開発による都市化がすすみ、生活環境も大きく変わりつつあります。こうした中、開発に伴う発掘調査が行われ、先人の生活が解明されつつありますが、一方では遺跡の保存に関する問題があることも否めないところです。

さて、今回当遺跡地内において共同住宅建設が計画され、郡山遺跡第112次となる発掘調査を実施いたしました。ここに報告する成果は研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いです。

先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図りつつ、後世に継承して行くことは私たちに課せられた責務と考えているところであり、皆様のご理解をお願いするところであります。

最後になりましたが、調査並びに本報告書の刊行に際しましては多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

平成9年3月

仙台市教育委員会

教育長　堀　籠　克　彦

例　　言

1．本書は共同住宅建設工事に伴う郡山遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書掲載の図1は国土地理院発行の5万分の1「仙台」を複製使用した。

3．本書中の土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原：1976) を使用した。

4．遺構全体図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo.1原点(X＝0，Y＝0)とし、高さは標高値である。

5．本文中で記した方位角は真北線を基準としている。

6．遺構略号は下記とし、全遺構に通し番号を付した。

ＳＩ　竪穴住居跡　　ＳＢ　建物跡　　ＳＤ　溝跡

ＳＫ　土坑　　Ｐ　ピット・柱穴

7．遺物実測図の中心線は、径がほぼ確定できるものを実線、やや不定のものを破線とした。網スクリーントーン貼り込みは黒色処理を示している。

8．本報告の執筆は1～Ⅴ-1・Ⅵ・Ⅶを渡部弘美が、Ⅴ-2を三塚　靖が分担した。

9．本遺跡の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

目　　次

序　　文
例　　言
Ⅰ．はじめに……1
　1．調査に至る経過……1
　2．調査要項……1
Ⅱ．遺跡の位置と環境……2
　1．地理的環境……2
　2．歴史的環境……2
Ⅲ．調査の方法と経過……5
Ⅳ．基本層位……5
Ⅴ．検出遺構と出土遺物……10
　1．Ⅰ区の遺構と遺物……10
　　1）竪穴住居跡……10
　　2）掘立柱建物跡……14
　　3）溝跡……16
　　4）土坑……17
　　5）柱穴・ピット群……18
　　6）Ⅳ層面検出の溝跡……18
　2．Ⅱ区の遺構と遺物……18
　　1）竪穴住居跡……18
　　2）溝跡……28
　　3）土坑……30
　　4）柱穴・ピット群……35
Ⅵ．出土遺物について……36
　1．遺物の種類と分類……36
　2．出土した土師器・須恵器について……39
Ⅶ．総括とまとめ……41
　写真図版……45

図・表・写真目次

図1　周辺の遺跡……3
図2　都山遺跡全体図……4
図3　基本層位……6
図4　発見遺構全体図……7
図5　Ⅰ区発見遺構全体図……9
図6　SI1692住居跡出土遺物……10
図7　SI1692住居跡……11
図8　SI1693住居跡・出土遺物……12
図9　SI1694住居跡・出土遺物……13
図10　Ⅰ区掘立柱建物跡・柱穴平面図……14
図11　Ⅰ区掘立柱建物跡断面図1……15
図12　Ⅰ区掘立柱建物跡断面図2……16
図13　Ⅰ区溝跡断面図……16
図14　Ⅰ区溝跡平面図……17
図15　SD1698・1716溝跡出土遺物……17
図16　Ⅰ区検出土坑……18
図17　SK1714土坑出土遺物……18
図18　Ⅱ区発見遺構全体図……19
図19　SI1696住居跡出土遺物……20
図20　SI1696住居跡……21
図21　SI1697住居跡出土遺物1……22
図22　SI1697住居跡……23
図23　SI1697住居跡出土遺物2……24
図24　SI1729住居跡……25
図25　SI1741住居跡……26
図26　SI1743住居跡……27

図27　II区溝跡平面図……28
図28　II区溝跡断面図……29
図29　II区土坑平・断面図1……31
図30　II区土坑平・断面図2……32
図31　II区土坑出土遺物1……33
表1　発見遺構一覧……42
写1　郡山遺跡航空写真
写2　SI1696 住居跡全景
写3　I区遺構検出状況
写4　I区発見遺構
写5　I区発見遺構
写6　I区西壁断面
写7　I区北壁断面
写8　I区北壁断面
写9　SI1692 住居跡全景
写10　SI1692 住居跡ピット10土層断面
写11　SI1693 住居跡全景
写12　SI1693 住居跡ピット2土層断面
写13　SI1694 住居跡全景
写14　SB1691 掘立柱建物跡ピット3土層断面
写15　SB1723 掘立柱建物跡全景
写16　SB1723 掘立柱建物跡ピット38土層断面
写17　SB1724 掘立柱建物跡全景
写18　SB1724 掘立柱建物跡ピット26土層断面
写19　SB1733 掘立柱建物跡ピット16土層断面
写20　ピット12土層断面（A－1）
写21　SD1698 溝跡全景
写22　SD1698 溝跡土層断面
写23　SD1716 溝跡全景
写24　SD1732 溝跡検出状況
写25　SD1732 溝跡土層断面
写26　SK1706 土坑全景
写27　SK1706 土坑土層断面
写28　SK1714 土坑全景
写29　SK1731 土坑土層断面
写30　II区遺構確認状況
写31　II区発見遺構全景
写32　II区東壁断面
写33　II区南壁断面
写34　II区南壁断面（6ライン）
写35　II区南壁断面（7ライン）
写36　II区中央部深掘り断面
写37　SD1696 住居跡土層断面
写38　SI1696 住居跡カマド全景
写39　SI1696 住居跡ピット1土層断面
写40　SI1697 住居跡床面検出状況
写41　SI1697 住居跡土層断面
写42　SI1697 住居跡床面出土遺物
図32　II区土坑出土遺物2……34
図33　柱穴列断面図……35
図34　ピット211出土遺物……35
図35　その他出土遺物……35
写43　SI1697 住居跡b周溝土層断面
写44　SI1697 住居跡a周溝土層断面
写45　SI1729 住居跡カマド部土層断面
写46　SI1729 住居跡カマド内遺物出土状況
写47　SI1741 住居跡土層断面
写48　SI1743 住居跡土層断面
写49　SI1743 住居跡周溝土層断面
写50　SI1743 住居跡ピット1土層断面
写51　SD1699 溝跡全景
写52　SD1699 溝跡土層断面
写53　SD1737 溝跡全景
写54　SD1737 溝跡土層断面
写55　東西に延びる溝跡群全景
写56　南北に延びる溝跡群全景
写57　SD1702 溝跡土層断面
写58　SD1703 溝跡土層断面
写59　SD1711 溝跡土層断面
写60　SK1701 土坑全景
写61　SK1701 土坑土層断面
写62　SK1707 土坑全景
写63　SK1707 土坑遺物出土状況
写64　SK1708 土坑全景
写65　SK1717 土坑全景
写66　SK1717 土坑土層断面
写67　SK1718 土坑全景
写68　SK1719 土坑全景
写69　SK1726 土坑全景
写70　SK1726 土坑土層断面
写71　SK1727 土坑全景
写72　SK1728 土坑全景
写73　SK1736 土坑土層断面
写74　SK1738 土坑全景
写75　SK1738 土坑土層断面
写76　SK1739 土坑全景
写77　SK1742 土坑全景
写78　SK1742 土坑土層断面
写79　SK1744 土坑全景
写80　SK1746 土坑全景
写81　SK1747 土坑全景
写82　SK1747 土坑土層断面
写83　出土遺物1
写84　出土遺物2

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経過

古くより郡山遺跡は諏訪神社北側の畑を中心に古瓦が散布する地区とその北方に位置する土師器・須恵器が散布する郡山三丁目地区が知られていた。本格的な発掘調査が行われたのは昭和54年の開発行為に伴う事前調査が初めとなる。以来、遺跡の範囲・性格を主目的とする国庫補助事業としての調査、開発行為に伴う事前調査として 100次を超える調査が実施されてきた。当遺跡の詳細は各年次の報告等に委ねるが、７世紀後半から８世紀初頭にかけての官衙跡であることが明らかとなっている。二時期（Ⅰ期官衙・Ⅱ期官衙）の官衙遺構群の存在が確認されており、性格として郡衙(評衙)・国府が考えられている。さらにⅡ期官衙の南方で郡山廃寺を確認している。なお、縄文時代後期から近世の遺構・遺物も検出されており連綿と続く複合遺跡であることも確認されている。

近年、郡山地区も宅地開発等に伴い周辺環境が少しづつ変貌をとげている。平成７年12月、セルコホーム株式会社 代表取締役 新本恭弘氏より郡山六丁目24地内において共同住宅建設工事に関わる届が提出された。当地点は郡山遺跡西南部の南側隣接地にあたる。このため仙台市教育委員会では当地点の遺構・遺物の有無の確認のため、平成８年１月に確認調査を実施した。結果として、郡山期と判断される竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑等が検出された。これらの成果をもとに協議の結果、事前調査で対処することになり、平成８年９月９日より記録保存を目的とした調査を実施するに至った。なお、確認調査成果をもとに南側約1.3haの遺跡範囲の拡大を行っている。

2．調査要項

遺 跡 名 称：郡山遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－104）
所　　在　　地：宮城県仙台市太白区郡山六丁目24－１外
調 査 事 由：共同住宅建設工事
調査対象面積：約2,500㎡（調査面積：約636㎡）
調 査 主 体：仙台市教育委員会
調 査 担 当：仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員：確認調査　篠原信彦　豊村幸宏
　　本 調 査　渡部弘美　三塚　婿
調 査 期 間：平成８年１月８日～１月11日
　　平成８年９月９日～12月11日
整 理 期 間：平成８年12月12日～平成９年３月19日
調 査 協 力：セルコホーム株式会社
調査参加者：赤間淳子　板橋祝子　伊藤はるよ　大内孝子　大友泰子　奥田美津子　小野栄子　小野さよ子
　　菊地和江　酒井正雄　佐藤すみ子　篠原良子　鈴木貴美子　曽根ちよ子　鞠田ふくよ　針生ふなよ
　　針生せつ子　峯岸安好　吉田アキヨ　依田光子　柴田　明　小野早央里　柴田徳郎　遠藤清子
　　永野くみ子　菊田親男　武藤季鷹　奥山妙子　奥山裕子
整理参加者：赤間　大内　大友　小野(さ)　菊地　鈴木　曽根　種田　針生(せ)　依田　小野(早)　鈴木由美

II．遺跡の位置と環境

1．地理的環境

郡山遺跡は仙台市の東南部、太白区郡山二～六丁目地内に所在する。ＪＲ長町駅東側、広瀬川と名取川の合流点北西約２kmの地点にあたる。

周辺地形を概観すると、奥羽山系の面白山地を源とする名取川が高館・青葉山丘陵を東流開析し、七北田・青葉山丘陵を東流開析する広瀬川が郡山地区で合流し太平洋に注いでいる。両河川とも中流域で段丘を発達させ、丘陵端から下流域において広大な面積を有する沖積平野が両河川により形成され、地理的区分で「宮城野海岸平野」と称され、さらに河川合流点付近の河間が低地となり当地域周辺は「郡山低地」と称されている。周辺には自然堤防・後背湿地・旧河道が観察され、海岸部には数列の浜堤もみられる。

現在、郡山周辺は都市化の影響のもと古来の姿は完全に失われているが、昭和20年代頃までは自然堤防上にブロック的に屋敷林で囲まれた列状の集村形態が観取され、自然地形を利用した田畑や条里型土地割りもみられた。標高は10～12m 前後で地形的にはほぼ平坦面であるがやや南側へゆるく傾斜をみる。

2．歴史的環境

名取川及び広瀬川周辺地域は当郡山遺跡をはじめとし各時代の遺跡が数多く分布している。ここでは両河川合流点付近を中心に代表的な遺跡を概観してみる。

旧石器時代　富沢遺跡がある。第30次調査では地表下3m の面で約２万年前の後期旧石器時代の生活跡と当時の環境を伝える自然遺物が確認されている。焚火跡と考えられる炭のまとまりが発見され、周囲から100点以上の石器が出土し、数多くのグイマツなどの針葉樹や動物のフンなどが確認されている。針葉樹を中心とした湿地林が広がっていたものと考えられ、動物の越冬地、狩猟活動の場と推測されている。

縄文時代　名取川支流の笊川両岸には六反田・下ノ内浦・伊古田・山口・大野田等の遺跡群が連なっている。標高10m 前後の自然堤防に立地し、重層構造の遺構面をもつ。六反田遺跡では地表下2m 地点で中期の住居跡群が確認され、下ノ内浦遺跡では後期の墓跡が数多く発見されている。大野田遺跡では後期の環状集石群が確認され、墓域と祭祀の場であったと考えられている。

弥生時代　南小泉・西台畑・富沢・高田Ｂ・中在家南遺跡がある。南小泉・西台畑両遺跡は昭和のはじめ飛行場拡張工事・耕土採掘時に土器類が出土し知られた遺跡である。明確な遺構は確認されていないが中期の土器棺が検出されている。富沢遺跡は生産遺構が主となり中期（桝形囲・十三塚式期）の水田跡が重層且広範囲に存在していることが確認されている。高田Ｂ・中在家南両遺跡では河川跡から中期の土器と共に農具などの豊富な木製品が出土し、東北地方における弥生時代の生活を知るうえで重要な発見となった。

古墳時代　遠見塚古墳・大野田古墳群・南小泉・中在家南遺跡がある。遠見塚古墳は前期末から中期はじめの全長約110m の前方後円墳で市内最大規模をもつ。割竹形木棺が２基確認され管玉・小玉・鉄鏃が出土している。規模・施設からみて副葬品が少なく、当地域における前期古墳の特質がみられる。大野田古墳群は３基の古墳を除き他はすべて墳丘が削平を受けている。現在まで30基の古墳が調査で確認され、円墳が大半を占めるが前方後円墳が１基含まれている。中期後半から後期にかけて築造されたものと考えられている。南小泉遺跡では員数の差はあるが古墳時代全般にわたる集落跡が各地点で確認されている。当時期の中心地域の一つと考えられる。中在家南遺跡では河川跡から土器群と共に多くの木製農具が出土し、前時代から続く生業資料が確認された。

当郡山遺跡の官衙存続期間は古墳時代末の７世紀後半から奈良時代初めの８世紀初頭が考えられているが、出土遺物から当時期の諸様相・関連が窺われる遺跡が確認されている。当遺跡北西約３km地点の大年寺・愛宕山丘陵面に大きく５群に分かれる向山横穴墓群がある。造営開始時期は６世紀末頃であるが、多くは７世紀後半から８世

番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	陸奥国分寺	寺院	沖積地	奈良・平安	18	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古墳・平安
2	陸奥国分尼寺	寺院	沖積地	奈良・平安	19	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古墳・平安
3	愛宕山横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳	20	大野田古墳群	古墳	自然堤防	古墳
4	大年寺山横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳	21	大野田遺跡	包含地	自然堤防	縄文～古墳
5	宗禅寺横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳	22	王ノ壇遺跡	居館・他	自然堤防	縄文～中世
6	二ツ沢横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳	23	西台畑遺跡	包含地	後背湿地	弥生・古墳
7	茂ケ崎横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳	㉔	郡山遺跡	官衙	自然堤防	古墳末～奈良初
8	茂ケ崎城跡	城館	丘陵	中世	25	北目城跡	城館	自然堤防	室町・江戸
9	南小泉遺跡	集落跡・他	沖積地	弥生～近世	26	高田B遺跡	生産跡・他	後背湿地	弥生～中世
10	遠見塚古墳	前方後円墳	沖積地	古墳前期	27	今泉遺跡	城館・他	自然堤防	弥生・古墳・中世
11	若林城跡	城跡	沖積地	戦国～江戸	28	下飯田遺跡	集落跡	浜堤	古墳末～奈良
12	仙台東郊条里跡	条里	沖積地	奈良・平安	29	栗遺跡	集落跡	自然堤防	古墳
13	中在家南遺跡	包含地	自然堤防・河川跡	弥生・古墳	30	安久東遺跡	集落跡・他	自然堤防	弥生・古墳・奈良
14	神柵遺跡	官衙施設？	自然堤防	奈良末～平安初	31	中田南遺跡	集落跡・他	自然堤防	古墳～中世
15	富沢遺跡	生産跡・他	自然堤防・後背湿地	旧石器～近世	32	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
16	山口遺跡	集落跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中世	33	戸ノ内遺跡	墓跡・他	自然堤防	古墳・平安・中世
17	下ノ内浦遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古墳・平安	34	四郎丸館跡	城館・他	自然堤防	平安・中世

図１　周辺の遺跡

図2　郡山遺跡全体図

紀前半に集中している。横穴墓の築造方法の特徴や副葬品の中に郡山Ⅰ・Ⅱ期官衙出土遺物と共通性が認められる土器類があり、関東地方からの人の派遣・移動が推察され、同官衙にかかわった人々の集団の墓と考えられる。また、当遺跡東方約4㎞地点の下飯田遺跡では集落跡が確認され、関東系の土師器が出土している。六反田遺跡では竪穴住居跡から上総型暗文土器が出土している。確認例は少ないが関東地方との関わりを示すものと考えられる。

奈良時代　陸奥国分寺跡・同尼寺跡・南小泉・神柵遺跡がある。国分寺跡南方1㎞地点の南小泉遺跡で当時期の集落跡が確認されている。国分寺建立関連集落の可能性も十分に推察され今後の調査が期待される。神柵遺跡は遺構・遺物の検討から律令行政末端の施設と考えられている。

平安時代　この時代になると各地域で集落跡が認められるが、当地域周辺では南小泉遺跡が中心地域となるようで各地点で集落跡が確認されている。竪穴住居跡と共に掘立柱建物跡が併設され、石帯が出土する集落もみられ有

力層の存在も窺われる。

中世　王ノ檀・富沢・高田B遺跡がある。王ノ檀遺跡では一辺50m四方と考えられる堀跡に囲まれた鎌倉時代頃の武士層の屋敷跡が確認されている。屋敷内には数多くの建物跡の柱穴や井戸跡が発見され、多量の遺物が出土している。また、火葬墓等の各種の墓跡も検出され、信仰に関する遺構・遺物も発見されている。富沢・高田B遺跡では堀で区画された建物跡が検出され屋敷跡と考えられている。富沢遺跡では木簡や烏帽子状の漆製品が出土している。両遺跡では水田跡も発見されている。

近世　北目城跡がある。栗野大膳の居城で、その後、伊達政宗が仙台城の完成まで居住したと伝えられる。複雑な構造の堀で囲まれた城館跡で、堀内部には戦国時代特有にみられる「障子」と呼ばれる障壁が築かれており、防御に力をいれた城館であることが確認されている。

なお、起源に関しては不明であるが、郡山地区東部には真北方向を基準とする一町四方の条里型土地割が広い範囲に観察された。二の坪・三の坪などの地名が残るが、現在はほぼ煙滅している。

Ⅲ．調査の方法と経過

今回提出された開発予定地は当遺跡の南西部にあたる。現況は盛土の更地となっていた。開発対象地は約2500㎡にのぼるが、最終的には建物部分の約636㎡の調査を行った。調査区は2箇所あり、北側をⅠ区、南側をⅡ区とした。調査対象地内に5m単位のグリッドを設定し、算用数字とアルファベット文字を用いた区名を付している。また、基準点は郡山遺跡調査の座標を使用している。南北ラインは磁北線となり、真北は南北ラインから東へ7度20分偏っている。

調査はⅠ・Ⅱ区とも盛土を重機で排除し遺構確認を進めたが、両調査区とも盛土以前の掘削が著しく遺構の残存が不良であった。また、以前の建築物の影響か土壌に変色部分がみられ遺構確認に手間取った。基本層は大別で6層確認した。遺構はⅡ層面とⅣ層面の二面で確認している。Ⅰ区では竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑等が確認されたが、全体的に遺存が悪く住居跡はすべて床面下での確認であった。Ⅱ区の遺構の分布からみても削平のため消滅した遺構の存在が十分に考えられた。Ⅱ区では竪穴住居跡・溝跡・土坑・柱穴等が確認されている。建物基礎のため遺構面は凹凸となっているが調査区全面に遺構が分布している。出土遺物は全体的に少ないが同類の土器が出土しておりⅠ・Ⅱ区の遺構群はほぼ同時期のものかと判断された。また、Ⅱ区では鉄滓が多量に出土しており鍛冶遺構の存在が窺われた。調査最終段階でⅡ区中央部に小トレンチを設定しⅣ層下部の確認を行っている。調査は12月11日に終了した。

Ⅳ．基本層位

調査地点は以前工場用地として使用され砂などで厚く盛土がされていたが、下部は削平及び建物基礎で遺構面が撹乱され遺存不良となっている。基本層はⅥ層まで確認したが、遺構はⅡ層及びⅣ層の二面で確認している。土壌は全体としてシルト質であるが下部につれて砂質及び粘土質となる。なお、Ⅰ層上部の盛土はⅠ区で160cm、Ⅱ区で80cm程ある。以下、各層の特徴を略述する。

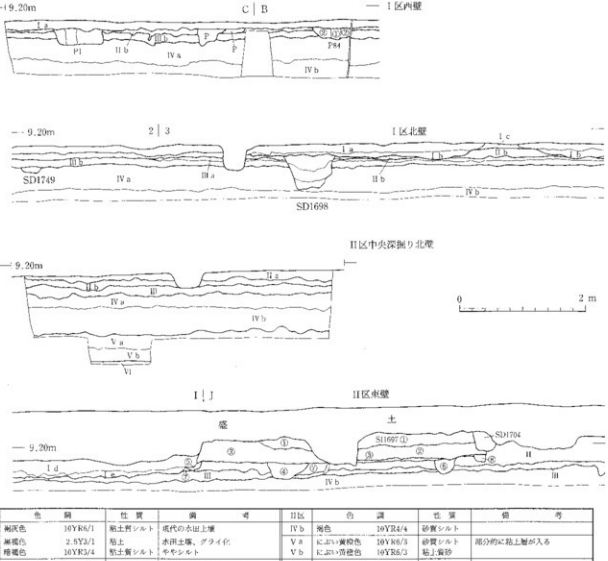
Ⅰ層＝Ⅰ区ではa～cの3枚に細分される。全域に分布し3枚の層とも水田土壌である。Ⅱ区ではa～eの5枚に細分される。a～cは南側に分布し畑地と考えられる。d・eは北側に分布し水田土壌である。

Ⅱ層＝褐色系の粘土質シルト層である。a・bの2枚に細分される。aはⅡ区中央部のみでの確認で、本来遺構確認面の層の可能性がある。bは全域に分布するがⅠ区では層厚が最大で15cm程と薄く、上部からの削平が推察される。Ⅱ区では最大厚45cm程を計りa・b層の細分が考えられるが調査時においては明確な線引きは出来なかった。遺構確認面である。

Ⅲ層＝暗褐色の粘土質シルト層である。層厚は最大で20cmを計る。Ⅰ区ではａ・ｂの２枚に細分されたが、Ⅱ区南側では色調が薄くなりにぶい黄褐色となっている。弥生土器（樹形圏式）が包含されている。

Ⅳ層＝褐色系の粘土質シルト層である。層厚約70cmを計る。ａ・ｂの２枚に細分される。上層に較べやや砂質となる。Ⅰ区では１条の溝跡を確認している。

Ⅴ層以下は部分的な確認である。Ⅴ層は層厚40cm程でにぶい黄橙色の砂質シルト及び粘土質の砂である。Ⅵ層は黒褐色の粘土である。Ⅵ層下部は灰色系及び黒色の粘土となっている。Ⅳ層以下での出土遺物は確認されなかった。



Ⅰ区	色	調	性 質	備 考
Ⅰａ	褐灰色	10YR6/1	粘土質シルト	現代の表土上層
Ⅰｂ	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	水田土壌、グライ化
Ⅰｃ	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	ややシルト
Ⅱｂ	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	酸化鉄粒しもみり状に含む
Ⅲａ	時褐色	10YR3/4	粘土質シルト	Ⅲｂ層に比べやや明るい
Ⅲｂ	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	
Ⅳａ	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	下部につれ砂質
Ⅳｂ	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	細砂・礫砂が混じる

Ⅱ区				
Ⅰｄ	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト	水田土壌
Ⅰｅ	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	水田土壌と考えられる
Ⅱａ	にぶい黄橙色	10YR6/4	粘土質シルト	ややシルト質
Ⅱｂ	褐色	10YR4/6	粘土質シルト	
Ⅲ	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	Ⅰ区に比べ全体的に明るい
Ⅳａ	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	やや砂質

Ⅱ区	色	調	性 質	備 考
Ⅳｂ	褐色	10YR4/4	砂質シルト	
Ⅴａ	にぶい黄橙色	10YR6/3	砂質シルト	部分的に粘土層が入る
Ⅴｂ	にぶい黄橙色	10YR6/3	粘土質砂	
Ⅵ	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	

SI1691 P84				
①	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡
②	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	掘り方埋土

SI1697				
①	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭化物粒・土師器片を含む
②	黒褐色	10YR2/3	シルト	炭化物粒・土師器片を含む
③	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	貼床
④	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	使面上のピット
⑤	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	ピット
⑥	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	旧の溝講
⑦	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	掘り方埋土
⑧	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	新の溝講

図３　基本層位

I区
II区
SD1716
SK1731
SK1714
SI1694
SB1724
SK1734
SB1733
SK1706
SB1691
SI1723
SD1698
SI1692
(S30)
(S50)
0
10m
SD1737
SI1729
SK1728
SI1743
SK1747
SK1746
SI1741
SD1721
SK1717
SK1738
SD1704
SK1719
SK1742
SK1744
SK1718
SD1711
SI1697
SK1726
SK1701
SK1707
SD1703
SK1727
SD1722
SD1702
SK1739
SD1712
SD1709
SI1696
SD1699
SK1736
SD1763
(W620)
(W590)

図4　発見遺構全体図

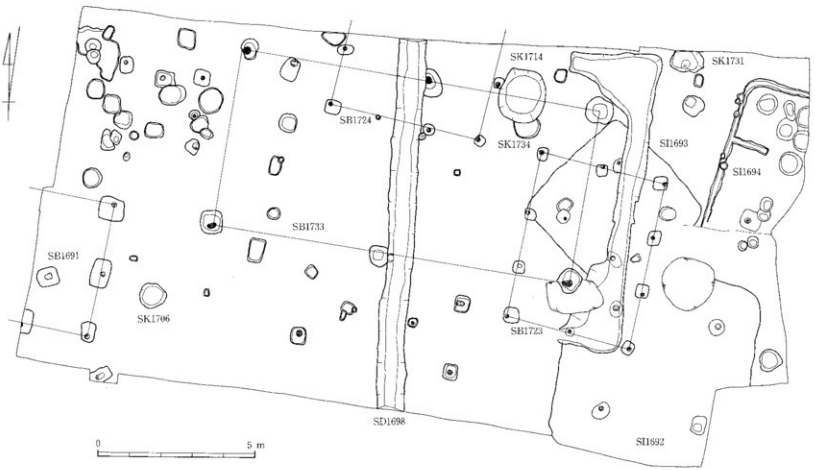


図5　I区発見遺構全体図

Ⅴ．検出遺構と出土遺物

1．Ⅰ区の遺構と遺物

検出した遺構には竪穴住居跡３軒、掘立柱建物跡４棟、土坑４基、溝跡３条、柱穴・ピットが多数ある。削平のため遺存状況が不良である。Ⅱ区の遺構群と較べても分布が散在しており、深度の浅い遺構は消滅したものと判断される。大半の遺構がⅡ層面での確認となるが、Ⅰ区では下層のⅣ層面で溝跡を１条確認している。

1）竪穴住居跡

SI1692 住居跡

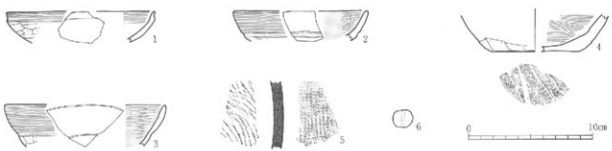
[遺存状況・重複]　C・D－４・５区に位置する。SD1716・SB1723 に切られ、SI1693 を切っている。削平のため住居掘り方プランでの確認である。壁・床面・カマド等は残存していない。

[平面形・規模]　平面形は隅丸の方形と考えられる。規模は東西軸で6.1m、南北軸は６ｍ以上を計る。西辺軸方向は N-2°-E である。

[床面・柱穴]　床面は削平のため残存していないが、掘り方上部に堅くしめた暗褐色土の貼床を確認している。上部が削平されており厚さは不明であるが全面に貼床が施されていたと考えられる。柱穴は住居隅対角線上で４基確認している。長軸50～60cm程の円形及び不整な円形で径17cm前後の柱痕跡を確認している。

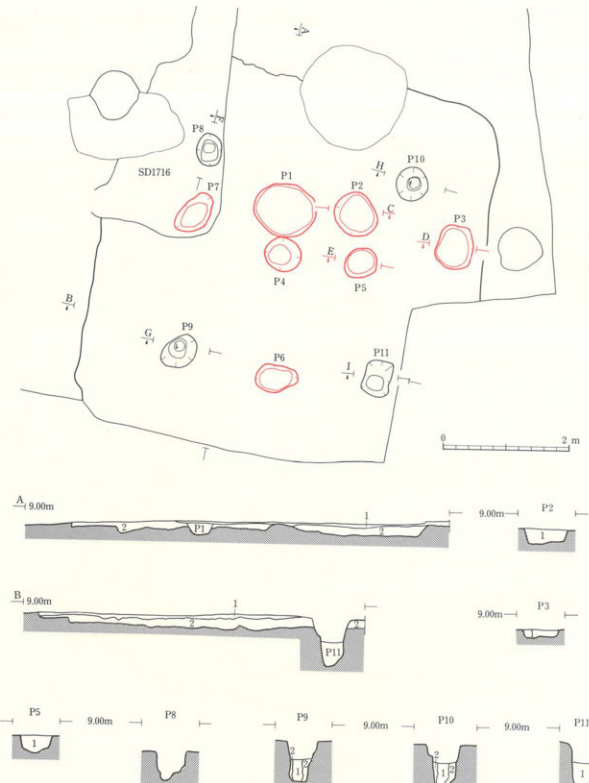
[床面下状況・その他]　住居掘り方埋土を１層確認している。黒褐色の粘土シルトで最大で20cm程の厚さを計る。底面は凹凸面となっている。北壁部と西壁部での確認であるが掘り方壁直下が段掘りとなり周縁帯状となっている。掘り方埋土上面で７基のピットを確認している。平面形はほぼ円形で径50～70cm、深さ10～30cmを計る。ほとんどのものに焼土・炭化物が含まれている。

[出土遺物]　ピット及び掘り方埋土から小片となった遺物が出土している。種類として土師器坏・甕、須恵器甕、土玉、鉄製品、焼けた骨片がある。形を知り得る資料は土玉１点のみである。



図番	層位	種類・種類	特　　徴	分類	写・図
1	2層	土師器　坏	口縁部短く内反し立ち上がる、外面＝口縁部－ヨコナデ・体部－ヘラケズリ、内面＝ヨコナデ	Ⅶ	
2	2層	土師器　坏	外面にない沈線状の段をもつ、外面＝口縁部－ヨコナデ・体部－ヘラケズリ、内面＝ヘラミガキ・黒色処理	ⅠG	
3	2層	土師器　坏	外面に段をもつ、外面＝口縁部－ヨコナデ・体部－ヘラケズリ、内面＝ヘラミガキ・黒色処理	ⅠH	
4	2層	土師器　甕	底部に木葉痕、推定底部径72mm、外面＝体部下端－ヘラケズリ、内面＝ナデ		
5	2層	須恵器　甕	体部破片、外面に格子状のタタキ痕跡、内面に同心円状のオサエ痕跡		
6	2層	土製品　土玉	高さ14mm・幅16mm・中心部に僅２mm程の孔が１ケ、球体をやや潰した形・上下面摩滅、外面はヘラミガキ、重さ3.5g		30

図６　SI1692 住居跡出土遺物



層位	色調		性質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	やや粘土質、明黄褐色土をスジ状に含む、最床
2	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	II・III層土ブロック状に入る、振り方埋土
P 9 -1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡
-2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土を斑に含む
P 10-1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡
-2	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	黄褐色土を斑に含む

層位	色調		性質	備考
P 11-1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土を多く含む
P 1 -1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	焼土を少量含む
P 2 -1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	焼土をブロックで含む
P 3 -1	黒色	10YR2/1	粘土質シルト	焼土・灰の層
P 5 -1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	焼土をまばらに含む

図7　SI1692 住居跡

SI1693 住居跡

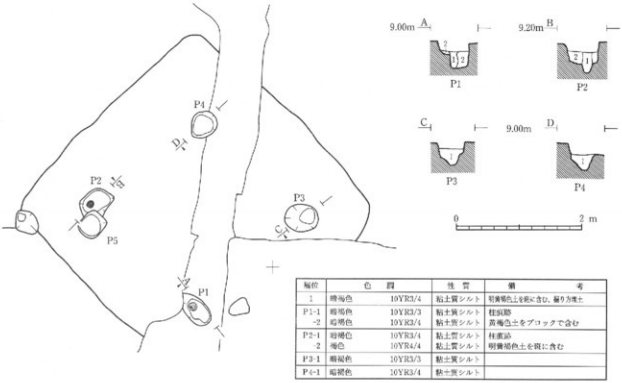
[遺存状況・重複]　B・C－4・5区に位置する。SI1692・SB1723・SD1716に切られている。削平のため壁・床面・カマド等残存していない。掘り方埋土面での確認である。

[平面形・規模]　平面形は隅丸の正方形と判断される。規模は東西・南北辺で4.2mを計る。西辺軸方向はN-37°-Eである。

[柱穴]　掘り方埋土面で7基のピットを確認している。位置関係等からP1・2・3・4の4基が柱穴と判断された。長軸50～60cm程の不整な円形で径10～14cmの柱痕跡を2ケ所で確認している。

[床面下状況・その他]　西辺中央部でやや広い範囲に焼面が検出され、カマドに関係するものとも考えられた。掘り方埋土は暗褐色の粘土質シルトで、底面はゆるい凹凸面となっている。

[出土遺物]　掘り方埋土・ピットから少片となった遺物が少量出土している。種類として土師器坏・甕、鉄製品、骨片がある。全体の形を知り得る資料はない。



層位	色調	性質	備考
1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	明黄褐色土を微に含む、掘り方埋土
P1-1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡
-2	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	黄褐色土をブロックで含む
P2-1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡
2	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	明黄褐色土を微に含む
P3-1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
P4-1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	

図番	層位	種別・種類	特徴	分類
1	掘り方埋土	土師器・坏	外面に段をもつ、外面=口縁部～体部=ヘラミガキ、内面=ヘラミガキ・黒色処理	1D
2	掘り方埋土	土師器・坏	外面に段をもつ、外面=口縁部～ヨコナデ・体部～底部=摩滅のため不明、内面=ヘラミガキ・黒色処理	1F

図8　SI1693 住居跡・出土遺物

SI1694 住居跡

[遺存状況] B・C－５区に位置する。小ピットに切られている。北辺と西辺の部分的な確認で、削平のため壁や床面は遺存しない。

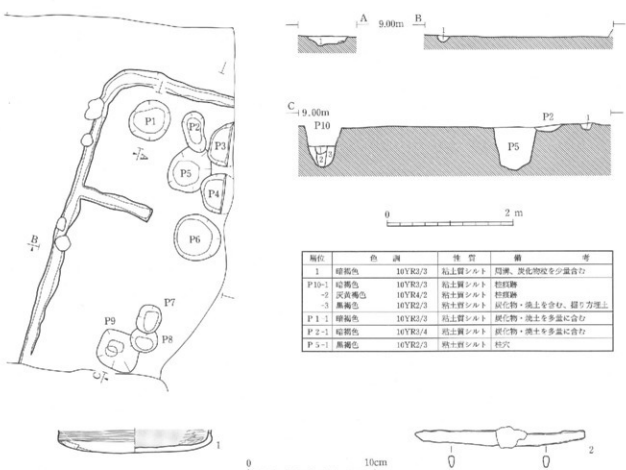
[平面形・規模] 平面形は隅丸の方形と考えられる。北辺は2.1m、西辺は5.1mまで確認したが、柱穴の位置等から判断して本来5.5～６ｍの長さをもっていたと考えられる。西辺軸の方向はＮ-10°-Ｅである。

[柱穴] 底面で９基のピットを確認している。位置・規模からＰ５・10が柱穴と考えられた。長軸70cm程の方形及び不整な円形で径18cmの柱痕跡を１ケ所で確認している。

[周溝] 幅20～30cmを計り住居跡を一巡するものと考えられる。さらに北辺南側２ｍの地点に西辺から内側に直角に延びる長さ1.1m・幅20cmの溝が取り付く。断面は浅い皿形である。

[その他] 柱穴以外のピットが７基ある。平面形は円形及び長円形で深さ15～30cmを計る。堆積土はすべて単層で暗褐色のシルト質の粘土である。焼土・炭化物を多量に含むものもある。

[出土遺物] 周溝・ピットから小片となった少量の遺物が出土している。種類として土師器坏・高坏・甕、鉄製品（刀子）がある。形を知り得る資料は刀子１点のみである。



層位	色調		性質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	周溝、炭化物校を少量含む
P10-1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡
-2	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	柱痕跡
-3	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	炭化物・焼土を含む、縮り方埋土
P１-1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	炭化物・焼土を多量に含む
P２-1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	炭化物・焼土を多量に含む
P５-1	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	柱穴

図番	層位	種別・種類	特徴	分類	写・図
1	確認	土師器　坏	外面－口縁部－ココナデ、体部～底部－ヘラケズリ、内面－ヘラミガキ・黒色処理、やや偏平の丸底	旧	
2	P10	鉄製品　刀子	平棟平造り、刀先及び基尻が確認される、長さ135mm、鋲のため区間分不明		33

図９　SI1694 住居跡・出土遺物

2）掘立柱建物跡

SB1691 掘立柱建物跡　B•C－1区に位置する。南北方向2間、東西方向1間まで確認した。2間×2間以上の建物跡である。平面図には図示されていないが北側柱列となる柱穴を壁面で確認している。方向は東側柱列でN-4°-Eである。柱間寸法は東側柱列で北から 226＋202cmで総長428cm、南側柱列で218cm、北側柱列は230cm前後である。柱穴はやや不整なものもあるが方形を呈する。規模は最小で60×40cm、最大で80×70cmと他の建物跡に較べて大きい。柱痕跡は16～18cmである。柱穴埋土より土師器坏・甕の小片が出土している。

SB1723 掘立柱建物跡　B•C－4区に位置する。梁行2間、桁行3間の南北棟の建物跡である。方向は西桁行でN5°-Eである。SI1692•1693を切り、SD1716に切られている。柱間寸法は梁北妻で西から200＋205cmで総長405cm、南妻で西から205＋197cmで総長402cmである。桁西側は北から196＋172＋164cmで総長532cm、東側は北から175＋184＋178cmで総長537cmである。柱穴はやや不整なものもあるが方形を呈する。規模は最大のもので一辺50cmを計るが40cm前後のものが主である。柱痕跡は径13～15cmである。柱穴から土師器坏・甕が出土している。

SB1724 掘立柱建物跡　A•B－3区に位置する。東西方向3間、南北方向1間まで確認した。3間×2間以上の建物跡である。方向は西側柱列でN-6°-Eである。小ピット•SK1714に切られている。P27は柱痕跡の最下部の残存と判断され掘り方は遺存しない。柱間寸法は南側柱列で西から156＋165＋162cmで総長483cm、西側柱列で180cm、東側柱列で185c cmである。柱穴は方形•円形•長円形と様々で規模にも差がある。南西端の柱穴が最大で50×44cm、南東端の柱穴は30cm四方である。柱痕跡は径14～16cmである。柱穴より土師器坏・甕が出土している。

SB1733 掘立柱建物跡　A～C－2～4区に位置する。梁行1間、桁行2間の1間×2間の東西棟の建物跡として確認している。方向は梁西妻でN-2°-Eである。柱間寸法が5 mを超えるため柱間に柱穴が存在したものと考えられたが確認できなかった。6基の柱穴は他に較べて規模•深さに違いがあり特徴的である。梁西妻列は5.65m、桁南側柱列は総長11.5mである。柱穴掘り方は円形及び方形のものが混在する。規模は57×64～83×87cm、深さは66～80cmで底面高はほぼ同じである。柱痕跡は径20cm程である。柱穴より土師器坏・甕が出土している。位置関係等からSD1716は当建物跡の雨落ち溝の可能性がある。

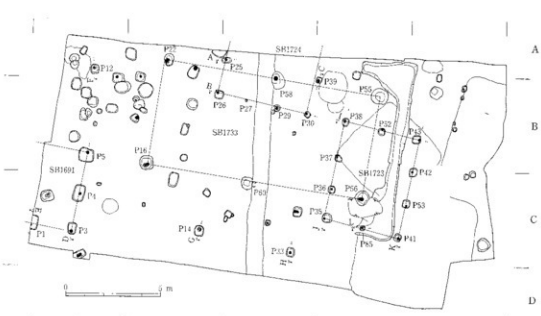
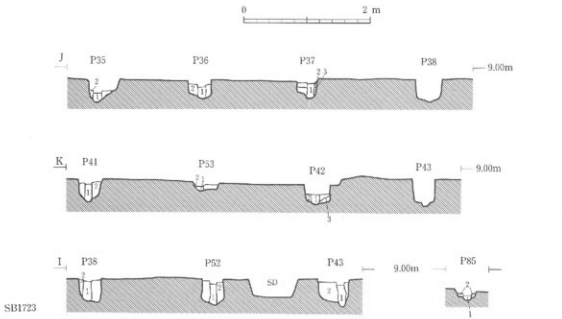
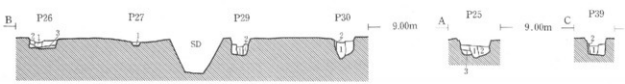


図10　Ⅰ区掘立柱建物跡・柱穴平面図

SB1691	層位	色調		性質	備考	SB1691	層位	色調		性質	備考
P 3	1	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	柱痕跡、径15cm、最先端部差	P 5	2	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	掘り方埋土
	2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土	P 1	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、径16cm、下部に散乱炭素
P 4	1	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	柱痕跡、径15cm		2	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	掘り方埋土
	2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	掘り方埋土		3	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	掘り方埋土
P 5	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、径15cm、炭化物粒含む		4	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	掘り方埋土

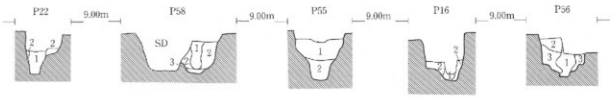


SB1723	層位	色調		性質	備考	SB1723	層位	色調		性質	備考
P 35	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、径15cm、下部に散乱炭素	P 42	1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	柱痕跡、径15cm、最先端部差
	2	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	掘り方埋土		2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土
P 36	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	柱痕跡、径13cm		3	褐色	10YR4/6	粘土質シルト	掘り方埋土
	2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土	P 38	1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	柱痕跡、径15cm、粘土粒含む
P 37	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	柱痕跡、径15cm、粘土粒含む		2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土
	2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	掘り方埋土	P 52	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、径15cm、粘土粒含む
	3	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	掘り方埋土		2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土、炭化物・粘土粒含む
P 41	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、径14cm、粘土粒含む	P 43	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、径13cm
	2	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	掘り方埋土、炭化物・粘土粒含む		2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土、炭化物・粘土粒含む
P 53	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、径15cm、粘土粒含む	P 85	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	柱痕跡、径12cm
	2	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	掘り方埋土、炭化物・粘土粒含む		2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	掘り方埋土



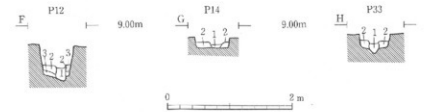
SB1724	層位	色調		性質	備考	SB1724	層位	色調		性質	備考
P 26	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、径15cm、下部に散乱炭素	P 30	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、径15cm、下部に散乱炭素
	2	褐色	10YR4/4	シルト	掘り方埋土		2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土
	3	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	掘り方埋土、炭化物を含む	P 25	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、径14cm、下部に散乱炭素
P 27	1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	柱痕跡下部？		2	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	掘り方埋土
P 29	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	柱痕跡、径13cm		3	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	掘り方埋土
	2	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	掘り方埋土	P 39	1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	柱痕跡、径17cm
							2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土

図11　I区掘立柱建物跡断面図1



SB1733	層位	色	調	性 質	備 考
P22	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、径24cm
	2	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	掘り方埋土
P58	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、径25cm、SD1698に切られる
	2	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	掘り方埋土、炭粒物・焼土を含む
	3	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	掘り方埋土
P55	1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	掘り方埋土、炭粒物・焼土を含む
	2	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト	掘り方埋土、炭粒物・焼土を含む

SB1733	層位	色	調	性 質	備 考
P16	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、径14×30cm
	2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	掘り方埋土
P60	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	掘り方埋土、SD1698を掘り方埋土
P56	1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	柱痕跡、径20×30cm
	2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土
	3	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	掘り方埋土



遺 構	層位	色	調	性 質	備 考
P12	1	黒褐色	10YR2/3	粘土	柱痕跡、径12cm
	2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土
	3	黄褐色	10YR5/6	砂質シルト	掘り方埋土

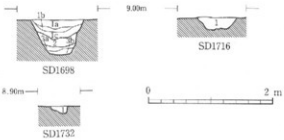
遺 構	層位	色	調	性 質	備 考
P14	1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	柱痕跡、径30cm、下部に炭粒多含
	2	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	掘り方埋土
P33	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、径15cm
	2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	掘り方埋土

図12　Ⅰ区掘立柱建物跡・柱穴断面図２

3）溝跡

SD1698溝跡　A～D－３区に位置する。小ピットに切られSB1733を切っている。南北方向に直線的に延びる。西辺の方向はN-4°-Wである。規模は上端幅84～94cm、下端幅35～48cm、深さ55cm前後、確認長11.8mを計る。南北間の底面高に差は認められない。断面形は逆台形である。堆積土はレンズ状堆積を示し、大別で３層確認した。暗褐色系の粘土質シルト・粘土である。遺物には土師器坏・鉢・甕、須恵器坏・甕がある。

SD1716溝跡　A～C－４区に位置する。SI1692・1693、SB1723を切っている。平面形は「コ」の字形となっている。南北辺は9.6m、北側の東西辺で2.9m、南側の東西辺で2.1mまで確認した。内側コーナー部は掘り過ぎで、本来南北辺幅で巡っていたものと判断される。方向は南北辺東側でほぼN-1°-Eである。南北辺中央部は上端幅64cm、下端幅32cm、深さ20cmを計る。底面は凹凸面である。断面形は壁がややきつい皿形である。堆積土は１層確認している。にぶい黄褐色のシルトで焼土・黄褐色土をまばらに含んでいる。位置等から判断してSB1733の雨落ち溝と考えられる。遺物には土師器坏・甕、須恵器蓋・甕、鉄製品（刀子）、礫がある。



遺 構	層位	色	調	性 質	備 考
SD1698	1 a	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	黄褐色土層的に粒状に含む
	1 b	黒褐色	10YR2/2	粘土質シルト	粘質強い、黒色土スジ状に含む
	1 c	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	黒色土層的にうすく入る
	2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土ブロックで含む
	3 a	黒褐色	10YR3/1	粘土	スジ状に堆積
	3 b	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	粒状の部成層
		暗褐色	10YR3/3	シルト	
SD1716	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	焼土粒・黄褐色土をまばらに含む
SD1732	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	ややシルト質

図13　Ⅰ区溝跡断面図

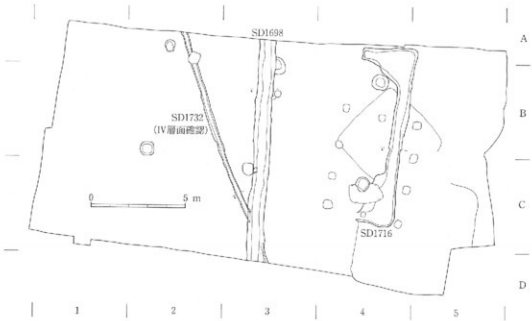
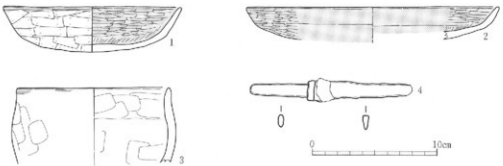


図14　Ⅰ区溝跡平面図



図番	遺構・層位	種別・種類	特　　徴	口径	底径	器高	分類	写・図
1	SD1698 1層	土師器　坏	外面＝口縁端部－ヨコナデ・体部～底部－横方向のヘラケズリ、内面＝ヘラミガキ・黒色処理、丸底の平底	(144)		37	ⅤA	10
2	SD1698 1層	土師器　坏	内外面ともヘラミガキ・黒色処理	(204)			ⅢC	
3	SD1698 2層	土師器　体	外面＝口縁端部－ヨコナデ・体部－ナデ、内面＝全面にナデ	(126)			Ⅳ	18
4	SD1716 1層	鉄製品　刀子	鋲が厚く詳細不明、平棟平造り、刃先欠損、残存長131mm・茎の長さ47mm					34

（　）内は推定値　単位は mm

図15　SD1698・1716 溝跡出土遺物

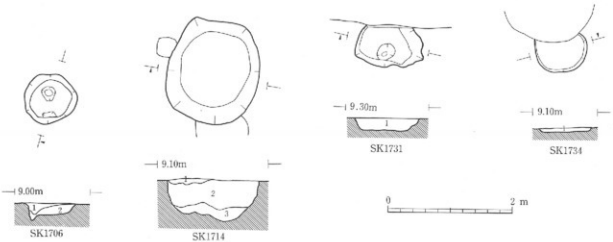
4）土坑

SK1706 土坑　C－1区に位置する。平面形はやや不整な円形である。規模は南北軸82cm、東西軸84cm、深さは18cmを計る。壁はややきつく立ち上がるが断面形は皿形である。底面はほぼ平坦であるがピット状の浅い落ち込みがみられる。堆積土は2層確認した。黄褐色系の粘土質シルトである。遺物には土師器片、礫がある。

SK1714 土坑　B－4区に位置する。SB1714・SK1734を切っている。平面形はほぼ円形である。規模は南北軸で166cm、東西軸で147cm、深さ65cmを計る。壁はきつく立ち上がり断面形は深い椀形となる。底面はゆるい凹凸面となっている。堆積土は3層確認した。黄褐色系の粘土質シルト・粘土である。堆積土は全体的に斑で焼土・炭化物粒が多量に含まれている。人為堆積と考えられる。2・3層から小片となった土器類が数多く出土している。

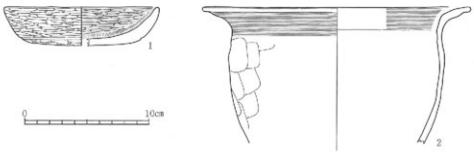
SK1731 土坑　A－5区北壁に位置する。平面形は長円形を基調とした不整形である。東西軸108cm、深さ20cmを計る。壁はややきつく立ち上がり断面形は逆台形である。底面はゆるい凹凸面となる。堆積土は1層確認した。暗褐色の粘土質シルトである。土師器片が少量出土している。

SK1734 土坑　B－4区に位置する。SK1714に切られている。平面形は円形と判断される。規模は東西軸で84cm、深さ7cmを計る。底面は平坦で断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。暗褐色のシルトで焼土・炭化物が含まれる。土師器片が出土している。



遺構	層位	色調		性質	備考	遺構	層位	色調		性質	備考
SK1706	1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	炭化物を斑に含む	SK1714	3	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	黄褐色土を斑に含む
	2	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	暗褐色土互層状に含む	SK1731	1	暗褐色	10YR3/4	シルト	黄褐色土を粒状に含む
SK1714	1	にぶい黄褐色	10YR5/4	粘土質シルト	褐色土を斑に含む	SK1734	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	焼土・炭化物粒を含む
	2	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	焼土・炭化物を多量に含む						

図16　Ⅰ区検出土坑



図番	層位	種別・種類	特徴	口径	底径	器高	分類	写・図
1	埋土	土師器　坏	外面＝口縁部－体部－ヘラミガキ・底部－ヘラケズリ、内面＝ヘラミガキ・黒色処理、沈線状の段、丸底状の平底	126		31	Ⅱ B	8
2	埋土	土師器　甕	外面＝口縁部－ヨコナデ・体部－ナデ、内面＝口縁部－ヨコナデ・体部－深鉄のため不明、口縁部きつく外反	(216)			Ⅱ	

（　）内は推定値　単位はmm

図17　SK1714 土坑出土遺物

5）柱穴・ピット群　Ⅰ区では70基程のピットを確認した。このなかで建物跡は４棟のみの組み合わせに止どまっている。特にA・B－１・２区には柱痕跡をもつピットが数多くみられ、東西・南北方向に直線的に延びる柱列も認められ、建物跡ないし一本柱列の存在が十分考えられたが、削平等のため不定となっている。なお、方形を呈する柱穴の南北辺の方向は掘立柱建物跡の方向とほぼ同じである。

6）Ⅳ層面検出の溝跡

SD1732 溝跡　A～D－２・３区に位置する。ややゆるく南側に屈曲をみるがほぼ直線的に延びる。上端幅20～30cm、下端幅12～15cm、深さ11cmを計る。堆積土は１層確認している。暗褐色の粘土質シルトである。遺物はない。

２．Ⅱ区の遺構と遺物

検出遺構には、竪穴住居跡５軒、溝跡11条、土坑17基、柱穴及びピット多数がある。柱穴・ピット群は調査区西半部にやや集中する傾向がみられたが、他の遺構は調査区全域に散在している。遺物は土師器類が主体を占めるが鉄滓の出土量も多く注意される。遺構は基本層のⅡ層で検出した。

1）竪穴住居跡

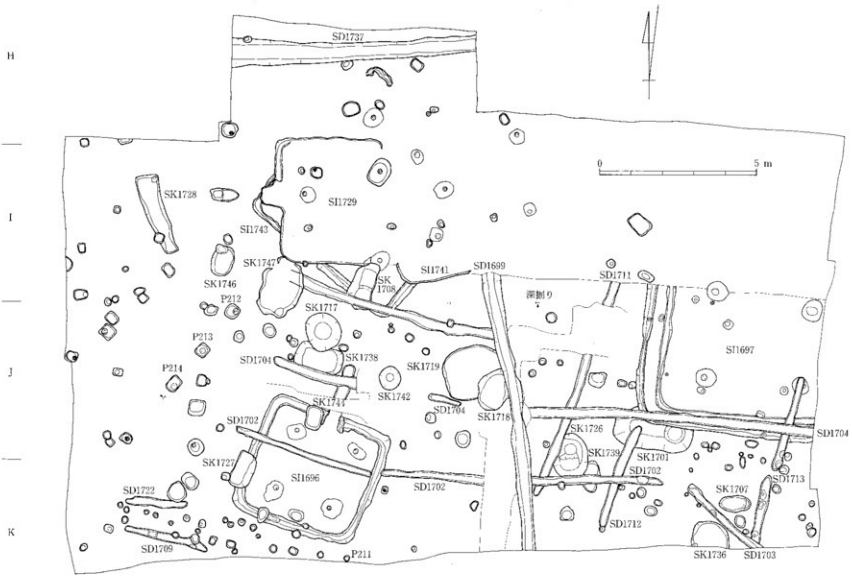


図18　II区発見遺構全体図

SI1696 住居跡

[遺存状況・重複] J・K－4・5区に位置する。SK1727・SK1744・SD1702・SD1704・ピットに切られている。煙道の一部分が削平されているが、全体的にみて遺存状況は良好である。

[平面形・規模] 平面形は隅丸方形で、規模は南北辺中央で4 m・東西辺で4.2m、床面積16.8㎡を計る。東辺軸の方向はN-13°-Eである。

[堆積土] 12層に分層される。ほぼレンズ状に堆積し自然堆積と考えられる。1・2層は褐色系のシルト、3～10層は黒褐色及び暗褐色の粘土質シルト、11層は褐色のシルトでやや砂質が強い。12層は褐色の砂質シルトである。なお、8層は周溝の堆積土、11層は貼床、12層は掘り方埋土である。

[床面・柱穴] 床面は平坦でほぼ全面に貼床が認められる。貼床は褐色のシルト層でやや砂質が強い。厚さは3～12cm前後である。床面で6基のピットを検出した。位置や規模などからP1・2・3・4が柱穴と考えられる。柱穴は長軸60cm程の不整な方形で径15cm前後の柱痕跡を確認している。

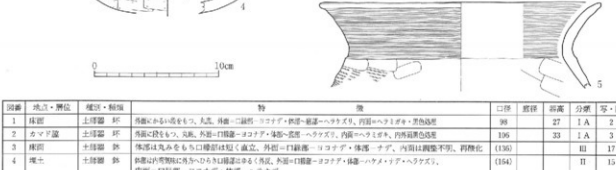
[壁・周溝] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は28cm程である。周溝はカマド部分を除き全周している。断面形はU字形を呈し、規模は平均すると幅28cm、深さ8cm程である。

[カマド] 北壁中央部に設置されている。燃焼部は側壁のみの残存で粘土質の土で構築されている。大きさは外法で80cm、内法で45cm、奥行50cmを計る。底面は赤変し堅くなっている。煙道部は長さ160cm、幅40cmの幅広のものである。底面はほぼ平坦で先端部がわずかに落ち込む。

[施設・その他] 南壁際中央部でP5を検出した。規模は長軸51cm、短軸33cm、深さ25cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は2層確認され褐色系の粘土質シルトである。位置・規模から住居の出入りに関するピットとも考えられる。P6は床面での検出であるが焼土・炭化物を含み廃棄の性格をもつピットと考えられる。

[床面下状況] 掘り方埋土及びピットを2基確認している。掘り方埋土は厚さ20cm程で底面はゆるい凹凸面となっている。P7・8には焼土・炭化物が含まれ廃棄の性格の穴と考えられる。

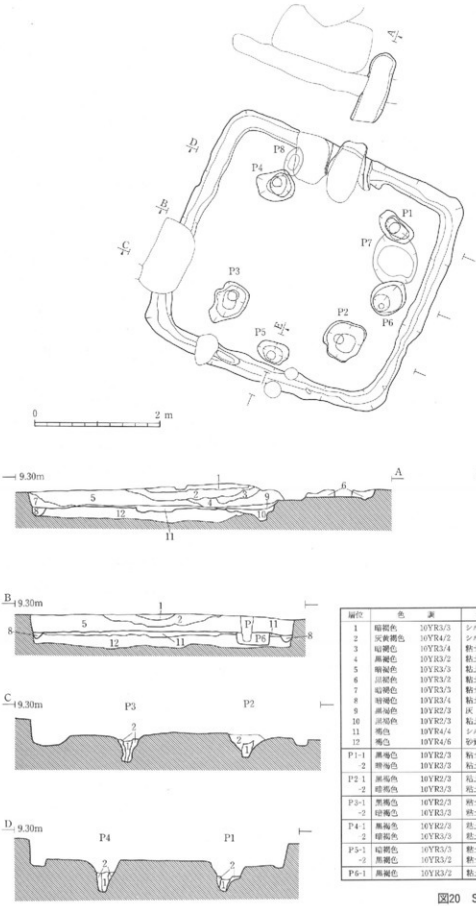
[出土遺物] 種類として土師器坏・鉢・甕、須恵器坏・蓋・甕・壺、羽口、鉄滓、骨片がある。ほとんどのものが破片資料で形を知り得るものは数少ない。大半のものが堆積土中の出土であるが、土師器坏・鉢が床面及びカマド袖脇から出土している。図示資料は土師器坏2点、鉢2点、甕1点である。



図番	地点・層位	種別・器種	特徴	口径	底径	器高	分類	写・図
1	床面	土師器 坏	体部にかるい段をもつ。丸底。体部～口縁部－ヨコナデ・底部～底部～ヘラケズリ。内面～ヘラミガキ。内外面黒色処理	98		27	ⅠA	2
2	カマド袖	土師器 坏	体部に段をもつ。丸底。外面～口縁部～ヨコナデ・体部～底部～ヘラケズリ。内面～ヘラミガキ。内外面黒色処理	106		33	ⅠA	3
3	床面	土師器 鉢	体部は丸みをもち口縁部は短く直立。外面～口縁部～ヨコナデ・体部～ナデ。内面は調整不明。再構化	(136)			Ⅲ	17
4	埋土	土師器 鉢	体部は平底気味に丸みのある段構成をもつ。外面～口縁部～ヨコナデ・体部～ハケメ・ミガキ・ヘラケズリ。内面～口縁部～ヨコナデ・体部～ヘラナデ	(154)			Ⅱ	15
5	埋土	土師器 甕	頸部に段をもち口縁部は外反。体部～口縁部～ヨコナデ・頸部～ナデ・ハラメ。内面～口縁部～ヨコナデ・体部～ナデ	(226)			ⅠA	19

（ ）内は推定値　単位cm

図19　SI1696 住居跡出土遺物



層位	色	調	性 質	備 考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	灰・炭化物を測的に含む
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	やや粘土質
3	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	
4	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	炭化物・灰を含む
5	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土を斑に含む
6	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	ｾﾏﾃ焦燃性、焦土ブロックを多く含む
7	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	炭化物少量含む
8	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	周溝部
9	黒褐色	10YR2/3	灰	基本的に灰の層、焦土粒を含む
10	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	ｾﾏﾃ撹り方、焦土・灰を斑に含む
11	褐色	10YR4/4	シルト	やや堅い、粘質
12	褐色	10YR4/6	砂質シルト	撹り方埋土
P1-1	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	柱痕跡、径15cm
-2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土
P2-1	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	柱痕跡、径15cm
-2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土
P3-1	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	柱痕跡、径16cm
-2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土
P4-1	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	柱痕跡、径14cm
-2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土
P5-1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	炭化物を含む
-2	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	黄褐色土ブロックで含む
P6-1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	流土・炭化物多量に含む

図20　SI1696 住居跡

図20　SI1696 住居跡

SI1697 住居跡

[遺存状況・重複] Ⅰ・J－7・8区に位置する。SD1704・SD1713・ピットに切られ、SK1701を切る。住居の北側と東側は削平及び調査区外となるため詳細は不明である。

[増改築] 住居壁内側にL字状にに延びる溝が確認されている。壁に並行し、規模も周溝とほぼ同じであることから旧の住居の周溝と判断した。拡張範囲は西側で70cm、南側で50cm程である。旧の周溝の断面形はU字形で幅23cm前後、深さ7～25cmを計る。柱穴は新旧とも同じである。

[平面形・規模] 平面形は隅丸方形と考えられる。東西軸4.5m、南北軸5.8mまで確認され、規模は壁及び柱穴の位置から推定して新の住居は南北辺6.1m、東西辺7.5m程、旧の住居は南北辺5.1m、東西辺6.1m程と判断される。西辺の方向はほぼN-0°-Eで真北である。

[堆積土] 7層に分層される。1・2層は褐色系の粘土質シルトで炭化物を含み、特に1層では土器片・礫が数多く含まれている。3層は暗褐色の粘土質シルトで炭化物を多量に含む。4・5層は褐色系の粘土質シルトで炭化物を少量含む。6層は褐色及び黄褐色の粘土質シルトで、層自体版築状となり焼土・炭化物を多量に含む。貼床である。7層はにぶい黄褐色の粘土質シルトで掘り方埋土である。

[床面・柱穴] 床面は平坦でほぼ全域に貼床が認められる。貼床の厚さは4～9cm前後である。床面上で16基のピットを検出した。位置や規模などからP18・19・20・21が柱穴と考えられる。柱穴は長軸60～70cm程の不整な円形で径15～20cmの柱痕跡を確認している。

[壁・周溝] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高14cmである。新の周溝は壁際直下で検出された。断面形はほぼU字形を呈し、規模は幅23cm、深さ7cm程である。

[施設・その他] 柱穴以外のピットを床面上で14基確認している。この中でP30は位置・規模からSI1696のP5同様に住居の出入りに関するピットの可能性がある。P25・31は灰・焼土・炭化物が多量に含まれ、廃棄の性格をもつピットと考えられる。

[床面下状況] 掘り方埋土及びピットを6基確認している。掘り方底面は凹凸面となっており、厚さは平均して15cm程であるが30cm程を計る地点もある。

[出土遺物] 土器類や鉄滓が多量に出土している。土器類はほとんどが破片資料で接合が不可である。多くは1・2層の堆積土からの出土であるが、掘り方埋土からも少量出土している。なお、土師器坏と鉢各1点が床面出土である。種類として土師器坏・高坏・甕、須恵器坏・壺・甕、羽口、石製品（砥石）、鉄製品（刀子・鏃）、鉄滓、礫がある。図示資料は土師器坏5点、壺1点、須恵器坏2点・蓋1点・壺2点、石製品3点、鉄製品4点である。

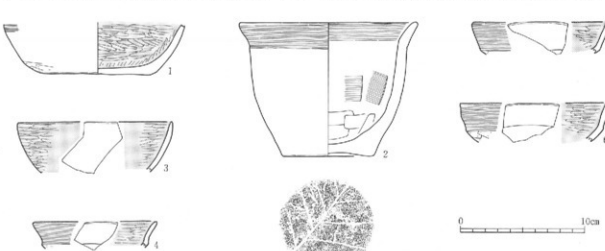
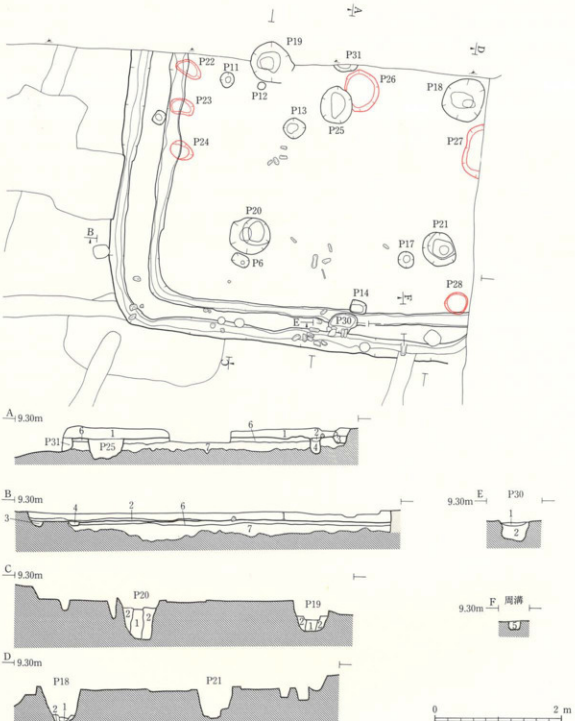


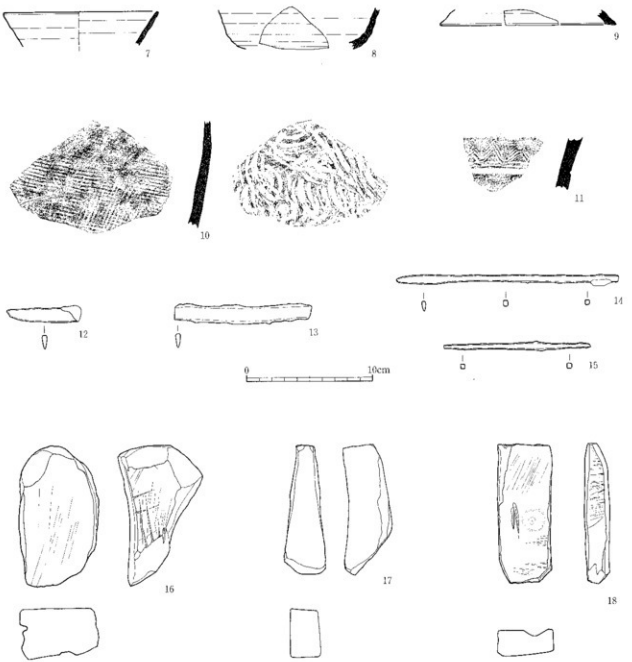
図21 SI1697住居跡出土遺物1



層位	色	調	性 質	備 考
1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	土器片・礫・炭化物含む
2	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	炭化物少量含む
3	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	新の周溝、炭化物多量に含む
4	にぶい黄褐色	10YR5/4	粘土質シルト	旧の周溝、炭化物少量含む
5	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	旧の周溝東側
6	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	貼床、二種の土が斑状になる
	にぶい黄褐色	10YR5/3	粘土質シルト	炭化物多量に含む
7	にぶい黄褐色	10YR5/4	粘土質シルト	掘り方埋土、下部凹凸面
P18-1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、径13×20cm

層位	色	調	性 質	備 考
P18-2	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	掘り方埋土
P19-1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、径20cm
-2	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	掘り方埋土
P20-1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、径18cm
-2	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	掘り方埋土
P25	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	炭化物・焼土多量に含む
P31	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	炭・炭化物・焼土含む
P30-1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	
-2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	炭化物含む

図22　SI1697 住居跡



図番	地点・層位	遺跡・種類	特徴	口径	底径	器高	分類	写・図
1	床面	土師器 坏	平底、外傾気味に立ち上がる、外面＝口縁部－ヨコナデ・体部下部 ヘラケズリ、内面＝ヘラミガキ・黒色処理		87		VI	12
2	床面	土師器 鉢	口縁部ゆるく外傾、底部に木葉痕、外面＝口縁部－ヨコナデ、内面＝口縁部－ヨコナデ・体部－ヘラナデ・ナデ	144	74	109	I	14
3	7層	土師器 坏	内弯気味に立ち上がる、内外面ともヘラミガキ・黒色処理				IV B	
4	1層	土師器 坏	外面にゆるい段、口縁部ゆるく外反、外面＝口縁部－ヨコナデ・体部－ヘラケズリ、内面－ヘラミガキ・黒色処理				I F	
5	1層	土師器 坏	外面部曲、口縁部外傾、外面＝口縁部 ヨコナデ・体部 －ヘラケズリ、内面＝ヘラミガキ・黒色処理				I E	
6	1層	土師器 坏	外面ゆるく湿曲、口縁部外傾、外面＝口縁部－ヨコナデ・体部－ヘラケズリ、内面－ヘラミガキ・黒色処理				I E	
7	1層	須恵器 坏	外傾での立ち上がり、ロクロ調整	(124)			IV	
8	7層	須恵器 坏	外傾気味に立ち上がる、ロクロ調整、下部に回転ヘラケズリ				IV	
9	埋土	須恵器 蓋	口縁端の下部が平坦、ロクロ調整				II C	
10	7層	須恵器 蓋	体部破片、外面－平行叩き、内面－同心円文のオサエ					
11	1層	須恵器 蓋	沈線＋隆線の上部に波状沈線					29
12	1層	鉄製品 刀子	残存長59、平板平造り、刃先強鋭					
13	1層	鉄製品 刀子	残存長110、平板平造り					
14	1層	鉄製品 鏃	残存長176、一端部が偏平で先端部と判断される、断面－充端部は楕円形・中央部は四角形、大きさ4×5					31
15	1層	鉄製品 鏃	残存長116、断面四角形、大きさ4×5					
16	P27	石製品 砥石	砥面は2面、他の面は研磨溝がみられる、不整形、やや軟質、安山岩質凝灰岩					36
17	1層	石製品 砥石	両端部欠損、砥面は全面、やや不整な短冊形、やや硬質					37
18	埋土	石製品 砥石	砥面は1面、所々による凹凸あり、短冊形、硬質、砥部岩					38

（ ）内は推定値 単位はmm

図23 SI1697 住居跡出土遺物2

SI1729 住居跡

[遺存状況・重複] H・I－4・5区に位置する。SI1741・SI1743・SK1708を切る。SK1747との重複関係は土色の変化のため不明である。削平等のため不明な点が多い。床面は遺存せず、柱穴は確認されない。

[平面形・規模] 平面形は隅丸方形である。北・西辺は直線的に延びるが、西辺はカマドを境として段違い状となっている。東辺部が不明であるが、規模は北辺で3.4m、西辺で3.9mを計る。西辺の方向はN-7°-Wである。

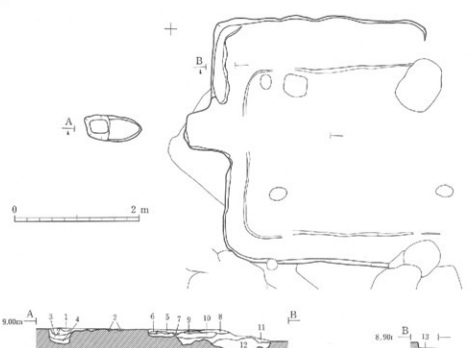
[堆積土] カマド及び周溝のみでの確認である。大きく11層に分層した。

[壁・周溝] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、周溝底面からの高さは最大で16cmを計る。周溝は西壁北側部のみで検出している。断面形は皿形で幅23cm程を計る。堆積土は1層確認され褐色の粘土質シルトである。

[カマド] 西壁中央部に設置されている。燃焼部と煙道部で構成されるが、燃焼部は壁外方に張り出す形態をもつ。壁のみの残存であるが、大きさは幅70cm、奥行75cmを計る。底面は赤変し堅くなっている。煙道部は一部削平を受けているが、長さ160cm、幅40cm程である。先端部はピット状となり一段低くなっている。

[その他・施設] 住居内側で壁に並行する浅い段を確認している。位置等から判断して住居掘り方に関するものとも考えられたが不明である。

[出土遺物] 種類として土師器坏・甕、須恵器甕、鉄滓がある。すべてが破片資料で形を知り得るものはない。カマド内出土の土師器甕は体部から底部のもので、外面には全面に縦方向のヘラケズリ、内面にはヘラナデの調整が施されている。



層位	色	調	性 質	備 考
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	カマド掘込部、炭化物少量含む
2	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	〃 、焼土・炭化物多く含む
3	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	〃 、炭化物含む
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト質粘土	〃 、炭化物少量含む
5	黒褐色	10YR2/2	粘土質シルト	カマド堆積層、焼土・炭化物多量に含む
6	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	〃 、焼土塊含む
7	灰黄褐色	10YR5/2	粘土質シルト	カマド燃焼部、焼土・炭多量に含む
8	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	カマド燃焼部、炭化物少量含む
9	黒褐色	10YR2/2	シルト	〃 、炭化物多量含む
10	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	〃 、炭化物・炭含む
11	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	カマド掘り方
12	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	〃
13	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	周溝

図24 SI1729 住居跡

SI1741 住居跡

[遺存状況・重複] H・I－5・6区に位置する。SI1729に切られSI1743を切る。削平のため南西隅部の壁と柱穴

のみの確認である。

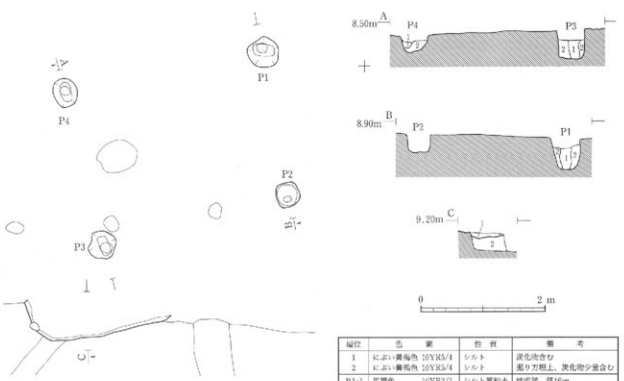
[平面形・規模]　平面形は残存する壁部から判断して隅丸方形と考えられる。壁北側にほぼ同規模で方形に組む4基のピットを確認している。壁等の位置関係から当住居の柱穴と判断した。壁は南西部分のみの確認であるが、規模は壁及び柱穴の位置から東西軸6.3m、南北軸5.4m程と推定される。残存する南辺の方向はN-69°-Eで、柱穴のP3とP4の柱痕跡の軸方向はN-21°-Wである。

[堆積土]　2層のみの確認である。1層は住居堆積土、2層は住居掘り方埋土である。両層ともにぶい黄褐色のシルトである。

[床面・柱穴]　部分的な確認であるが掘り方埋土を床面としている。柱穴はP1・2・3・4である。長軸40～50cm程の不整な方形で径20cm前後の柱痕跡を確認している。

[壁・周溝]　壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は10cm程である。周溝は検出されなかった。

[出土遺物]　1層中より土師器坏・甕、鉄滓が出土している。すべてが小破片で形を知り得るものはない。



層位	色調	性質	備考
1	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	炭化物含む
2	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	掘り方埋土、炭化物少量含む
P1-1	黒褐色 10YR2/2	シルト質粘土	柱痕跡、径16cm
-2	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘土質シルト	掘り方埋土
P3-1	褐色 10YR4/4	シルト質粘土	柱痕跡、径16cm
2	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘土質シルト	掘り方埋土
P4-1	黒褐色 10YR2/2	シルト質粘土	柱痕跡、径18cm
-2	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘土質シルト	掘り方埋土

図25　SI1741 住居跡

SI1743 住居跡

[遺存状況・重複]　H・I－5・6区に位置する。SI1729・SI1741・SK1708・SK1747・SD1721に切られる。削平のため南辺及び北辺西側隅のみの残存である。

[平面形・規模]　平面形は隅丸方形である。規模は南北辺西側で6.1m、東西辺南側で5.5mを計る。東側壁の方向はN-33°-Eである。

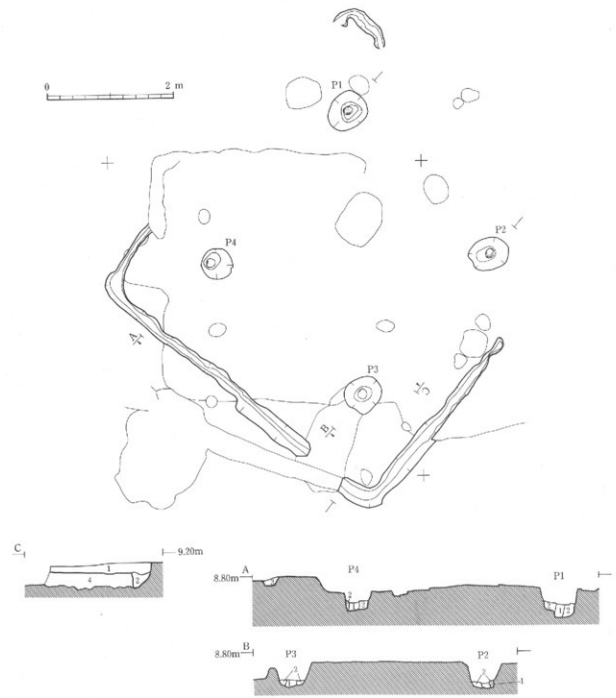
[堆積土]　4層確認している。1層は暗褐色のシルトで炭化物を含む。2・3層は周溝の堆積土である。4層は黄褐色土を含む褐色土で住居掘り方埋土である。

[床面・柱穴]　床面は南東側隅部分にわずかに残存するのみである。掘り方埋土土面を床面としている。住居内よ

り計17基のピットを検出したが、位置・規模から判断してＰ１・２・３・４が柱穴と考えられた。長軸50～65cm程の不整な円形で径15cm程の柱痕跡を確認している。

［その他・施設］　住居内において柱穴を含め多くのピットを確認したが、柱穴以外は撹乱が不明である。

［出土遺物］　１層中より土師器坏・高坏・甕、鉄滓が出土している。形を知り得るものはない。



層位	色　調		性　質	備　考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭化物・黄褐色土を含む
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	焼土、炭化物少量含む
3	暗褐色	10YR3/3	シルト質粘土	焼土、炭化物少量含む
4	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	掘り方埋土、黄褐色土ブロックを含む
P1-1	暗褐色	10YR3/4	シルト質粘土	柱痕跡、径13cm
-2	褐色	10YR4/4	シルト質粘土	掘り方埋土
P2-1	暗褐色	10YR3/4	シルト質粘土	柱痕跡、径15cm
-2	褐色	10YR4/4	シルト質粘土	掘り方埋土
P3-1	暗褐色	10YR3/4	シルト質粘土	柱痕跡、径15cm
-2	褐色	10YR4/4	シルト質粘土	掘り方埋土
P4-1	暗褐色	10YR3/4	シルト質粘土	柱痕跡、径15cm
-2	褐色	10YR4/4	シルト質粘土	掘り方埋土

図26　SI1743 住居跡

2）溝跡

SD1699 溝跡　I・J・K－6区に位置する。南北方向に直線的に延びる。底面での軸方向はN-15°-Wである。SK1718・SK1719・SD1704・SD1721を切る。規模は上端幅32～59cm、下端幅20～31cm、深さ8～29cm、確認長8.88mを計る。断面形は逆台形で底面高に大きな差はみられない。堆積土は2層確認した。黒褐色のシルト質粘土で1層では少量の炭化物を含む。遺物には土師器片・須恵器片・鉄滓がある。

SD1702 溝跡　J・K－5～7区に位置する。東西方向にほぼ直線的に延びるが、西側部では北側にやや屈曲している。SD1699に切られ、SI1696・SK1726・SK1739・SD1711・SD1712を切る。規模は上端幅17～31cm、下端幅12～22cm、深さ1～12cm、確認長11.85mを計る。断面形は皿形及びU字形である。底面高に大きな差はみられない。堆積土は1層のみ確認で褐色系のシルト層である。炭化物を少量含む。遺物には土師器片・須恵器片・鉄滓がある。

SD1703 溝跡　K－7・8区に位置する。東南－西北方向に直線的に延びる。SD1713を切る。規模は上端幅22～28cm、下端幅10～18cm、深さ6～20cm、確認長2.42mを計る。断面形は方形で底面高に大きな差はみられない。堆積土は2層確認した。オリーブ系のシルト質粘土で2層では酸化鉄の集積がみられる。遺物には土師器片・須恵器片がある。

SD1704 溝跡　J・K－5～8区に位置する。東西方向にほぼ直線的に延びるが、西側部では北側にやや屈曲をみる。SD1699に切られ、SI1696・SI1697・SK1701・SK1738・SD1711・SD1713を切る。規模は上端幅14～37cm、下端幅8～29cm、深さ1～22cm、確認長12.85mを計る。断面形は逆台形で底面高に大きな差はない。堆積土は1層のみの確認である。褐色のシルト層で炭化物及び黒褐色土のブロックを含む。遺物には土師器片・鉄滓がある。

SD1709 溝跡　K－4区に位置する。東西方向に直線的に延びる。他の遺構との切り合いはない。規模は上端幅16～29cm、下端幅12～24cm、深さ1～6cm、確認長2.68mを計る。断面形は皿形を呈し、底面高に大きな差はない。堆積土は1層のみの確認である。褐色の粘土質シルトで少量の炭化物を含む。遺物には土師器片・鉄滓がある。

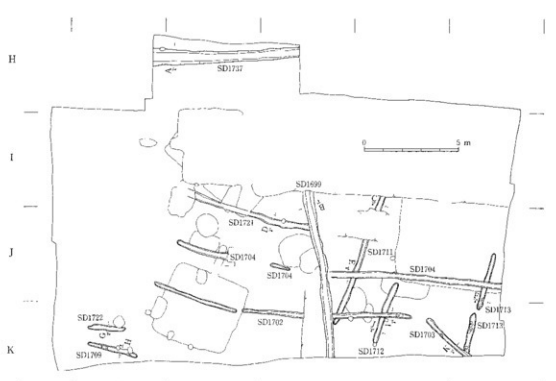


図27　II区溝跡平面図

SD1711 溝跡　I・J・K－6・7区に位置する。南北方向に直線的に延びる。SD1702・SD1704に切られSK1726を切る。規模は上端幅24～36cm、下端幅15～26cm、深さ2～10cm、確認長5.5mを計る。断面形は皿形で、底面高に大きな差はない。堆積土は1層のみの確認で黒褐色のシルト層である。少量の炭化物を含む。遺物には土師器片・須恵器片・鉄滓がある。

SD1712 溝跡　J・K－7区に位置する。南北方向に直線的に延びる。SD1702に切られSK1701を切る。規模は上端幅25～35cm、下端幅17～28cm、深さ2～4cm、確認長3.41mを計る。断面形は皿形で底面高に大きな差はない。堆積土は1層のみの確認でシルト層である。遺物には土師器片・鉄滓がある。

SD1713 溝跡　J・K－8区に位置する。南北方向に直線的に延びる。SD1703・SD1704に切られ、SI1697を切る。規模は上端幅21～33cm、下端幅17～29cm、深さ2～5cm、確認長5.45mを計る。断面形は皿形で底面高に大きな差はない。堆積土は1層のみの確認で灰オリーブのシルト層である。炭化物を含む。遺物には土師器片・須恵器片・鉄滓がある。

SD1721 溝跡　I・J－5・6区に位置する。東西方向にほぼ直線的に延びる。SD1699・ピットに切られ、SI1743・SK1708・SK1747を切る。規模は上端幅25～44cm、下端幅16～40cm、深さ3～12cm、確認長6.4mを計る。断面形は皿形で底面高に大きな差はない。堆積土は2層確認した。黄褐色の粘土質シルトを主体とし、レンズ状に堆積している。1層では少量の炭化物を含む。遺物には土師器小片・鉄滓がある。

SD1722 溝跡　K－4区に位置する。東西方向に直線的に延びる。他の遺構との切り合い関係はない。規模は上端幅17～29cm、下端幅12～25cm、深さ2～7cm、確認長1.98mを計る。断面形は皿形で底面高に大きな差はない。堆積土は1層のみの確認で褐色の粘土質シルトである。少量の炭化物を含む。遺物はない。

SD1737 溝跡　H－4～6区に位置する。東西方向に直線的に延びる。底面での軸方向はN-81°-Eである。小ピットに切られている。規模は上端幅49～94cm、下端幅27～47cm、深さ7～41cm、確認長7.73mを計る。断面形は逆台形である。底面はやや凹凸がみられたがほぼ平坦である。堆積土は4層確認した。レンズ状堆積である。遺物には土師器片・須恵器片・鉄滓がある

遺構	層位	色調	性質	備考	遺構	層位	色調	性質	備考
SD1699	1	黒褐色	10YR2/2	シルト質粘土	炭化物少量含む	SD1712	1	灰オリーブ	5Y5/2	シルト	グライ化
	2	黒褐色	10YR3/2	シルト質粘土	黄褐色土ブロックで含む	SD1713	1	灰オリーブ	5Y4/2	シルト	炭化物含む、グライ化
SD1702	1	灰オリーブ	5Y4/2	シルト	グライ化	SD1721	1	褐色	10YR4/4	シルト	炭化物少量含む
SD1703	1	オリーブ黒	5Y3/2	シルト質粘土	グライ化		2	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	褐色土ブロック少量含む
	2	灰オリーブ	5Y4/2	シルト質粘土		SD1722	1	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	炭化物少量含む
SD1704	1	褐色	10YR4/4	シルト	炭化物少量含む	SD1737	1	黒褐色	10YR2/3	シルト	黄褐色土ブロック状に含む
SD1709	1	褐色	10YR4/4	シルト質粘土	黄褐色土ブロックを含む		2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	黒褐色土ブロック状に含む
	2	黄褐色	10YR5/6	シルト質粘土	褐色土ブロックを含む		3	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	黄褐色土ブロックで含む
SD1711	1	黒褐色	10YR3/3	シルト	炭化物・褐色土ブロックを含む		4	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土まだらに含む

図28　II区溝跡断面図

3）土坑

SK1701 土坑　J－7区に位置する。SD1712・SD1704・SI1697 1に切られる。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸250cm、短軸125cm、深さ230cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形はきつい逆台形である。底面は不整な方形を呈し東側へ階段状に下がっている。東壁端部には径65cm、深さ40cm程の円形の落ち込みがある。堆積土は7層確認した。レンズ状の堆積であるが人為堆積と考えられる。各層より礫・炭化物が多量に出土している。遺物には土師器・須恵器・木製品（櫛）・鉄滓・貝殻がある。

SK1707 土坑　K－7・8区に位置する。平面形は長円形である。規模は長軸100cm、短軸55cm、深さ20cmを計る。東側にゆるい段をもつが断面形は皿形である。底面はやや凹凸がみられるがほぼ平坦である。堆積土は2層確認した。グライしており灰オリーブ色となっている。遺物には土師器片・須恵器坏・鉄滓がある。

SK1708 土坑　I・J－5区に位置する。SI1729・SI1743 を切り、SD1721 に切られる。平面形は不整な長円形である。規模は長軸155cm、短軸75cm、深さ100cmを計る。壁は急角度で立ち上がり断面形は逆台形状となる。底面には段差があり北側が35cm程高くなっている。堆積土は3層確認した。褐色系のシルト層である。遺物には土師器片・鉄滓がある。

SK1717 土坑　J－5区に位置する。SK1738 を切る。平面形はほぼ円形である。規模は長軸125cm、短軸115cm、深さ95cmを計る。底面はほぼ平坦であるがやや丸みをもつ。断面形は逆台形である。堆積土は6層確認した。褐色系のシルト層でレンズ状堆積である。遺物には土師器・須恵器・羽口・鉄滓がある。

SK1718 土坑　J－6区に位置する。SD1699 に切られ SK1719 を切る。平面形はやや不整な楕円形である。規模は長軸140cm、短軸115cm、深さ30cmを計る。断面形は皿形で、底面はやや凹凸面である。堆積土は3層確認した。黒褐色系のシルト層である。各層とも炭化物を含むが2層では多量に確認された。遺物には土師器・須恵器・鉄製品（鏃）・鉄滓がある。

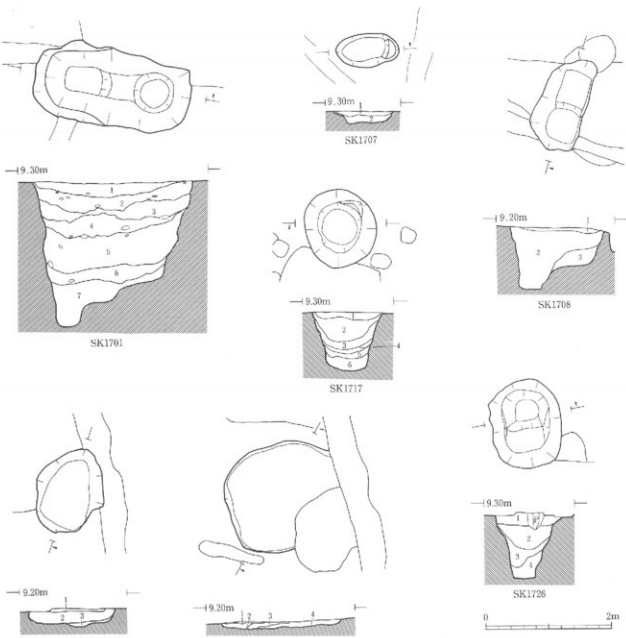
SK1719 土坑　J－6区に位置する。SK1718・SD1699 に切られる。平面形はやや丸みをもつ不整な方形である。規模は南北軸160cm、東西軸は180cmまで確認、深さ12cmを計る。断面形は皿形で、底面はやや凹凸があるがほぼ平坦である。堆積土は4層確認した。褐色系のシルト層で各層に炭化物が含まれる。遺物には土師器・須恵器・鉄滓がある。

SK1726 土坑　J・K－6・7区に位置する。SD1702・SD1711・ピットに切られ SK1739 を切る。平面形はやや不整の楕円形である。規模は長軸140cm、短軸110cm、深さ100cmを計る。壁はきつく立ち上がり、断面形は逆台形である。底面には段差があり南側が45cm程高くなっている。堆積土は4層確認した。褐色系の粘土質シルト層でレンズ状堆積である。遺物には土師器・須恵器・羽口・鉄滓がある。

SK1727 土坑　J・K－4・5区に位置する。ピットに切られ SI1696 を切る。平面形は隅丸方形である。規模は長軸120cm、短軸65cm、深さ40cmを計る。壁は垂直に立ち上がり、断面形は方形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は5層確認した。上層は変色しオリーブ色となるが下層は黄橙色及び褐灰色のシルト層である。遺物には土師器・須恵器・鉄製品・羽口・鉄滓がある。

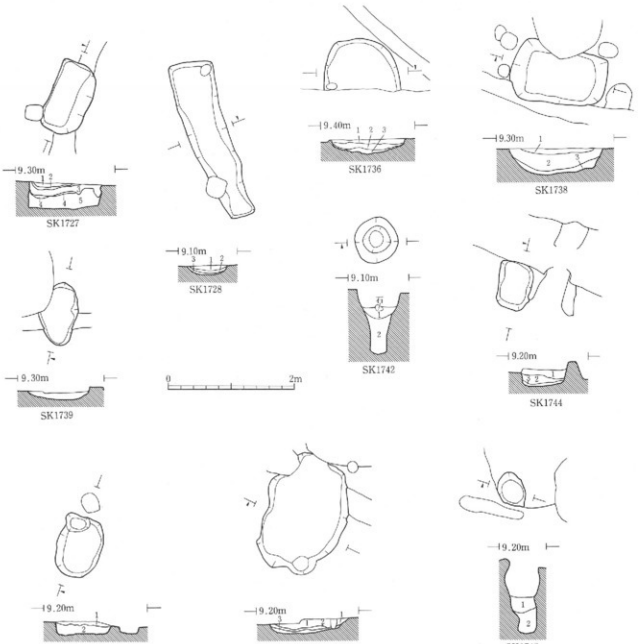
SK1728 土坑　I－4区に位置する。ピットに切られる。平面形は不整な長方形である。規模は長軸260cm、短軸65cm、深さ15cmを計る。壁はゆるやかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は3層確認した。褐色系の粘土質シルト層でレンズ状堆積である。遺物はない。

SK1736 土坑　K－7・8区に位置する。南半部が調査区外になるため全容は不明であるが、平面形は不整な円形と考えられる。規模は東西軸120cm、南北軸80cmまで確認、深さ25cmを計る。壁はゆるやかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は3層確認した。粘土質シルト層で変色のためオリーブ色となっている。レンズ状堆積である。遺物には土師器片がある。



遺構	層位	色調		性質	備考
SK1701	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	黄褐色土ブロック多量に含む
	2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	土器片・鐵・炭化物含む
	3	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	炭化物多量に含む
	4	灰黄褐色	10YR4/2	シルト質粘土	鉄・炭化物含む、微化鉄薬層
	5	褐色	10YR4/4	シルト質粘土	礫・炭化物・木片含む
	6	褐灰色	10YR4/1	シルト	礫子・木片含む、微化鉄薬層
	7	黒褐色	10YR3/1	シルト	貝粕・本製品含む、鉄化鉄生産
SK1707	1	灰オリーブ	5Y4/2	シルト	炭化物少量含む、グライ化
	2	灰オリーブ	5Y5/2	シルト質粘土	グライ化
SK1708	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	炭化物少量含む
	2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	褐色土ブロック含む、鉄化鉄薬層
	3	黒褐色	10YR3/2	シルト質粘土	黄褐色土ブロック多量に含む
SK1717	1	暗褐色	10YR3/4	シルト	土器片・炭化物含む
	2	褐色	10YR4/4	シルト	炭化鉄・切鉄褐色土ブロック含む
	3	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	明黄褐色土ブロック多量に含む
SK1717	4	にぶい黄褐色	10YR5/4	粘土質シルト	微化鉄殻含む
	5	褐色	10YR4/6	粘土質シルト	炭化物少量含む
	6	暗褐色	10YR3/4	シルト質粘土	炭化物含む
SK1718	1	黒褐色	10YR3/2	シルト	炭化物少量・黄褐色土ブロック含む
	2	黒褐色	10YR2/3	シルト	土器片・炭化物多量に含む
	3	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	炭化物少量含む
SK1719	1	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	炭化物少量含む
	2	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭化物ブロック含む
	3	黒褐色	10YR2/2	粘土質シルト	炭化物多量に含む
	4	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色土・炭化物少量含む
SK1726	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	土器片・炭化物含む
	2	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	炭化物少量含む
	3	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	黒褐色土ブロック含む
	4	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	炭化物含む

図29　II区土坑平・断面図1



遺構	層位	色調	性質	備考
SK1727	1	オリーブ黒色 5Y3/2	シルト	炭化物・酸化鉄粒含む
	2	灰オリーブ色 5Y5/3	シルト	炭化物・酸化鉄粒多量に含む
	3	オリーブ黒色 5Y3/1	粘土質シルト	炭化物ブロックで含む
	4	にぶい黄橙色 10YR6/4	シルト	炭化物・酸化鉄粒含む
	5	褐灰色 10YR4/1	粘土質シルト	酸化鉄粒含む
SK1728	1	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	炭化物・地山ブロック含む
	2	灰黄褐色 10YR5/2	粘土質シルト	炭化物多量に含む
	3	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	
SK1736	1	オリーブ褐色 5Y3/2	粘土質シルト	炭化物少量含む
	2	灰オリーブ色 5Y4/2	粘土質シルト	炭化物少量含む
	3	灰オリーブ色 5Y5/2	粘土質シルト	
SK1738	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物・酸化鉄粒含む
	2	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	炭化物少量・黒褐色土ブロック含む
	3	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	炭化物少量・黒褐色土ブロック含む

遺構	層位	色調	性質	備考
SK1739	1	灰オリーブ色 5Y2/4	シルト	
SK1742	1	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	
	2	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	炭化物少量含む
SK1744	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	炭化物少量・黒褐色土ブロック含む
	2	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	炭化物・焼土多量に含む
	3	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	炭化物少量・黒褐色土ブロック含む
SK1746	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	炭化物含む
	2	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	
SK1747	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物少量含む
	2	黒褐色 10YR2/2	粘土質シルト	にぶい黄褐色土含む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘土質シルト	炭化物少量含む
SK1748	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	炭化物少量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	炭化物多量に含む、土器片含む

図30　II区土坑平・断面図2

SK1738 土坑　J－5区に位置する。SD1704・SK1717に切られる。平面形は隅丸方形である。規模は長軸150cm、短軸100cm、深さ40cmを計る。断面形はややゆるい逆台形である。堆積土は3層確認した。褐色系の粘土質シルト層でレンズ状堆積である。遺物には土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓がある。

SK1739 土坑　K－7区に位置する。SD1702・SK1726に切られる。平面形は不整な楕円形である。規模は長軸100cm、短軸60cm、深さ20cmを計る。壁はゆるやかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。シルト層で変色のため灰オリーブ色となっている。遺物には土師器・鉄滓がある。

SK1742 土坑　J－5区に位置する。平面形はほぼ円形である。規模は東西軸70cm、南北軸75cm、深さ105cmを計る。壁は上方が開き、断面形は逆台形である。堆積土は2層確認した。褐色系の粘土質シルト層である。遺物には土師器・羽口・鉄滓がある。

SK1744 土坑　J－5区に位置する。SI1696を切る。平面形は隅丸方形である。規模は長軸75cm、短軸55cm、深さ40cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は逆台形である。堆積土は3層確認した。褐色系の粘土質シルト層で各層に炭化物がみられ、2層には焼土が多量に含まれる。遺物には土師器・須恵器がある。

SK1746 土坑　I－4区に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸95cm、短軸70cm、深さ20cmを計る。壁はややきつく立ち上がり、断面形は逆台形である。底面にはゆるい凹凸がみられる。堆積土は2層確認した。褐色系の粘土質シルト層である。遺物はない。

SK1747 土坑　I・J－5区に位置する。ピット・SI1729・SD1721に切られる。平面形は不整な楕円形である。規模は長軸190cm、短軸130cm、深さ23cmを計る。壁はゆるく立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は4層確認した。褐色系の粘土質シルト層である。遺物には土師器・須恵器・鉄製品（刀子・鏃）・鉄滓がある。

SK1748 土坑　J－6区に位置する。SK1719底面での確認である。平面形は不整な円形である。規模は東西軸42cm、南北軸52cm、深さ120cmを計る。壁は急角度で立ち上がるが、壁自体凹凸となっている。断面形は方形を基調とする不整形である。堆積土は2層確認した。褐色系の粘土質シルト層である。遺物には土師器・須恵器・鉄滓がある。

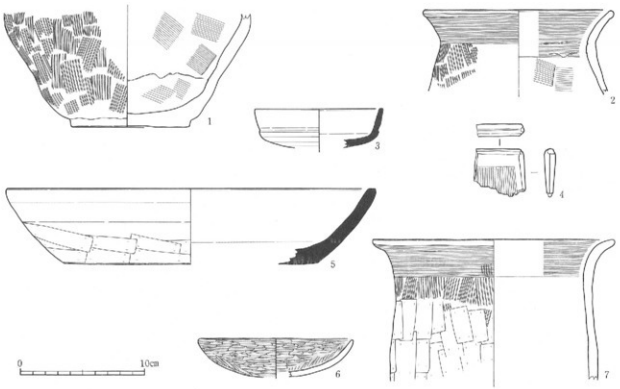
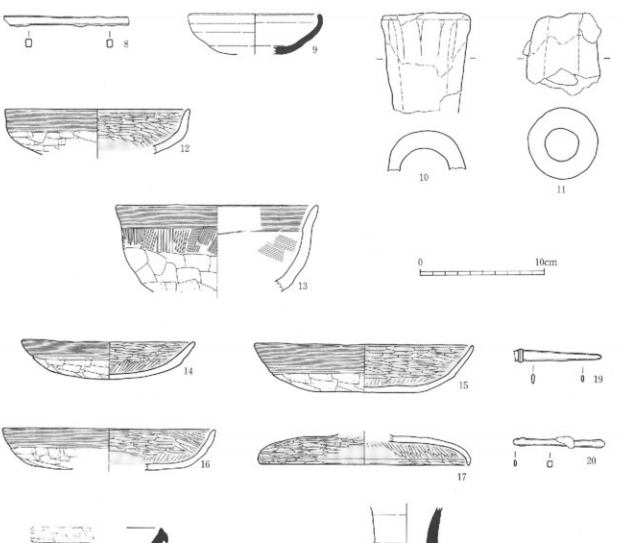


図31　II区土坑出土遺物1



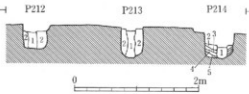
図番	遺構・層位	種別・種類	特徴	口径	底径	器高	分類	写・図
1	SK1701 埋土	土師器	壺	外面=ハケメ、内面=ヘラナデ・ナデ、器形に木葉痕		96		22
2	SK1701 7 層	土師器	壺	口縁部ゆるく外反、外面=口縁部～ヨコナデ・体部～ハケメ、内面=口縁部～ヨコナデ・体部～ヘラナデ	(154)			I B	26
3	SK1701 7 層	須恵器	坏	外面に段、丸底、口唇端部まるくおさまる、ロクロ調整、外面体部に回転ヘラケズリ	101			I A	23
4	SK1701 7 層	木製品	櫛	台木、上端及び一部欠を確認、歯・端部は面取りされる、残存厚4.1 mm程					25
5	SK1707 1 層	須恵器	鉢	口縁端部平坦、ロクロ調整、外面下部に手持ちヘラケズリ	288	205	61	B	26
6	SK1717 埋土	土師器	坏	全体的に丸みをもち低状、内外面ともヘラミガキ・黒色処理	126			IV A	9
7	SK1717 1 層	土師器	壺	口縁部ゆるく外反、体部直立、外面=口縁部～ヨコナデ・体部～ハケメ・ヘラケズリ、内面=口縁部～ヨコナデ	195			III	21
8	SK1718 2 層	鉄製品	鎌	両端部欠損、残存長101、断面四角形、大きさ4×5 mm					
9	SK1719 埋土	須恵器	坏	全体的に丸みをもち口縁部内弯、平底、ロクロ調整	106	44	34	III	25
10	SK1726 埋土	土製品	羽口	端部、ややラッパ状に開く、端部径70程、原方向のすす、鍛冶下方融解					
11	SK1726 埋土	土製品	羽口	端部、鍛冶に向かい大くおさまる、孔径25程後、端部融解付着溶着り					
12	SK1740 埋土	土製品	坏	丸みをもち立ち上がり口縁部直立、外面=口縁部～ヨコナデ・体部～ヘラケズリ、内面=ヘラミガキ、黒色処理	150			III A	
13	SK1744 2 層	土師器	鉢	大く立ち上がり口縁部やや外反、外面=口縁部～ヨコナデ・体部～ハケメ・ナデ・ヘラケズリ、内面=口縁部～ヨコナデ・体部～ナデ	(165)			II	16
14	SK1747 埋土	土師器	坏	外面に段、丸底、やや偏平、外面=口縁部～ヨコナデ・体部～ヘラケズリ、内面=ヘラミガキ・黒色処理	141	30		I B	4
15	SK1747 埋土	土師器	坏	外面にかるい段、平底状、外面=口縁部～ヨコナデ・体部～ヘラケズリ、内面=ヘラミガキ・黒色処理	168	39		II A	6
16	SK1747 埋土	土師器	坏	外面にかるい段、平底状、外面=口縁部～ヨコナデ・体部～ヘラケズリ、内面=ヘラミガキ・黒色処理	(173)			II A	7
17	SK1747 埋土	土師器	壺	端部三角形状、内外面ともヘラミガキ・黒色処理	169				13
18	SK1747 埋土	須恵器	甕	口縁端部と下三角形状に突起、沈線の上下に波状沈線					28
19	SK1747 埋土	鉄製品	刀子	刀その茎部分、茎況大くおさまる、残存長71					32
20	SK1747 埋土	鉄製品	鏃	残存長74、一端部が曲て端円形なり先端部と判断される、断面四角形、大きさ幅2×5・中央部4×5					
21	SK1748 埋土	須恵器	壺	底の周囲、二条のあさい沈線が巡る					

( ) 内は復元値　単位cm

図32　II区土坑出土遺物2

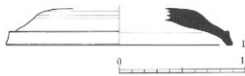
4）柱穴・ピット群

Ⅱ区では数多くの柱穴・ピットを確認しているが、確実に組み合うと判断される建物跡・柱列がなく不定となっている。大小のピットは調査区全体に散在しているが、方形及び円形を呈する柱穴群は調査区西側に集中している。さらに方形を呈する柱穴の南北辺の方向がほぼ同一方向で、真北に対し30度前後東に偏っている特徴が観察される。



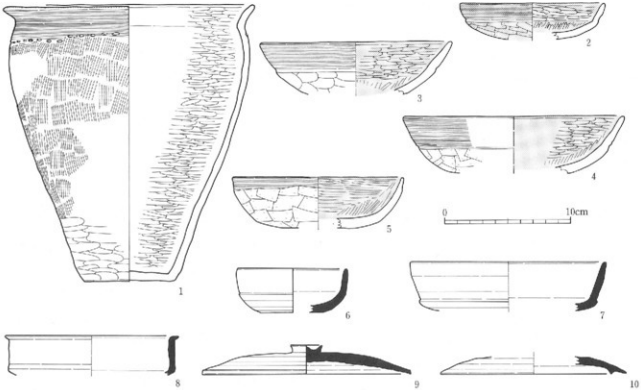
層位	色調	性質	備考
P212-1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト質粘土	柱痕跡、径19cm
-2	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	振り方埋土
P213-1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト質粘土	柱痕跡、径16cm
-2	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	振り方埋土
P214-1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト質粘土	柱痕跡、径19cm
-2	褐色 10YR4/4	シルト質粘土	振り方埋土、埋土は版築状
-3	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト質粘土	振り方埋土
-4	黒褐色 10YR3/2	シルト質粘土	振り方埋土
-5	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト質粘土	振り方埋土

図33　柱穴列断面図



出土遺跡	遺構・層位	特徴	分類
1	P211	隅丸方形、長軸は磁北から7°西に傾く。深さ0.27m	Ⅱb

図34　ピット211出土遺物



図番	出土地点	種別・種類	特徴	口径	底径	器高	分類	写・図
1	B 2	旧層中	弥生土器	壺	口頸部に櫛描文3帯以上、頸部に連続刺突文、外面～口縁部～ヨコナデ・体部～上端に横位刷毛目文、下部ヘラミガキ、内面～上半ヘラミガキ、底部ヘラ削	(20.0)				1
2	Ⅰ区	試掘	土師器	坏	外面に段・内面は横位、丸底、外面～口縁部～ヨコナデ・体部～ヘラケズリ、内面～ヘラミガキ、内外面黒色処理	11.6			ⅠA	
3	A 1	Ⅱ層上	土師器	坏	外面に段、やや開き気味、丸底、外面～口縁部～ヨコナデ・体部～ナデ、内面～ヘラミガキ・黒色処理	(15.0)			ⅠC	
4	Ⅰ区	Ⅰ層中	土師器	坏	外面に段、やや開き気味、丸底、外面～口縁部～ヨコナデ・体部～ヘラケズリ、内面～ヘラミガキ・黒色処理	(17.0)			ⅠC	5
5	B 2	Ⅱ層上	土師器	坏	口縁部短く直立気味、丸底、外面～口縁部～ヨコナデ・体部～ヘラケズリ、内面～あらいヘラミガキ・黒色処理	(15.0)			ⅤB	11
6	Ⅰ区	Ⅱ層上	須恵器	坏	口縁部真直ぎ気味、外面に段、平底、ロクロ調整、外面体部に回転ヘラケズリ	8.9	5.1	3.6	Ⅱ	24
7	Ⅱ区	試掘	須恵器	坏	口縁部外傾、外面に段、丸底ぎ、ロクロ調整、外面体部に回転ヘラケズリ	(9.0)			ⅠB	
8	C 5	撹乱	須恵器	鉢	口縁部短く「く」の字に屈曲、体部直立、ロクロ調整	(3.8)			A	
9	Ⅱ区	Ⅱ層上	須恵器	蓋	口縁端部内側からくつまみ出し、ツマミ部中央三角形状に突起、天井部～口縁部付近を除き回転ヘラケズリ	16.6	ツマミ2.6	2.4	Ⅱa	27
10	Ⅰ区	Ⅰ編	須恵器	壺	断面三角形のカエリ有り、ロクロ調整	14.8			Ⅰ	

（ ）内は推定値　単位は cm

図35　その他出土遺物

VI. 出土遺物について

1．遺物の種類と分類

1）弥生土器

Ⅰ区の基本層Ⅲ層中より甕一個体及び破片資料、遺構内及び他の基本層より小破片となった土器が出土している。図示資料は甕1点である。

甕　底部から外傾気味に立ち上がり、肩部付近でゆるく内弯し、頸部からきつく外傾し口縁部にいたる器形をもつ。器高22cm、口縁径20cm程で最大幅は口縁部にある。口唇部には植物茎と判断される押圧の刻みが全周している。頸部下には連続刺突文が巡る。調整は外面で口縁部付近にヨコナデ、体部には植物茎回転文、体部下部には横位方向のヘラミガキ、内面は全面横位方向のヘラミガキである。底部には木葉痕がみられる。時期は樫形囲式期である。他のⅢ層出土の破片資料も同式期と判断される。

2）土師器

すべての資料がロクロ不使用である。破片資料も含め確認できる器種として坏・高坏・蓋・鉢・甕があるが、図示資料は坏・蓋・鉢・甕の四種類にとどまる。

坏＝図示資料は破片資料も含めて25点である。器形及び調整から、大別して7つに分類ができる。

〔坏Ⅰ類〕　丸底のもので底部から口縁部にかけて円弧状に立ち上がり、口縁部と体部の境には段が巡る。さらに口縁部・段の形態からA～Fに細分した。

ⅠA類は口縁部が内弯気味で、段は器高の中位付近に位置する。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部～底部がヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理である。なお、外面にも黒色処理されるものがある。小形から大形まで3種（1～3）の大きさが認められる。

ⅠB類は口縁部が内弯気味で長く、段は器高の下部に位置する。器面調整は内外面ともヘラミガキ、内面は黒色処理である。胎土が白色系で他のものと違いがみられる。

ⅠC類は口縁部が内弯気味で、段は沈線帯で器高の中位付近に位置する。器面調整は内外面ともⅠA類と同じである。小形品である。

ⅠD類は口縁部が内弯気味で、段は凹線的で器高の中位付近に位置する。器面調整はⅠA類と同じである。

ⅠE類は口縁部が外傾気味で、段は稜的で器高の中位付近に位置する。器面調整はⅠA類と同じである。小形品である。

ⅠF類は口縁部がゆるく外反して立ち上がり、段は稜的で器高の中位付近に位置する。器面調整はⅠA類と同じである。小形品である。

〔坏Ⅱ類〕　平底風丸底のもので口縁部にかけて大きく丸みをもって立ち上がり、口縁部と体部の境には段が巡る。段の位置・調整からA・Bに分けた。

ⅡA類は口縁部が内弯気味で、段は器高の中位付近に位置する。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部～底部がヘラケズリ、内面がヘラミガキ・黒色処理である。

ⅡB類は口縁部が内弯気味で、段は器高の最下部に位置する。段はやや沈線状で退化的である。器面調整は外面で口縁部がヘラミガキ、体部～底部がヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理である。大きさに対し肉厚でやや小形のものである。胎土が白色系である。

〔坏Ⅲ類〕　丸底のものであるがやや偏平なものも含まれる。口縁部にかけて丸みをもって立ち上がる。口縁部と体部の境はゆるい屈曲となる。形態・調整からA・Bに分けた。

ⅢA類は口縁部が直立気味である。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部～底部がヘラケズリ、内面はヘラ

ミガキ・黒色処理である。

ⅢB類は口縁部が短く外傾気味である。器面調整は内外面ともヘラミガキ・黒色処理である。盤状のもので器形・調整から蓋の可能性もある。

〔坏Ⅳ類〕　丸底のもので口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。段等の屈曲はない。形態からA・Bに分けた。

ⅣA類は浅めの皿形である。器面調整は内外面ともヘラミガキ・黒色処理である。蓋の可能性もある。

ⅣB類は深めの椀形である。器面調整はⅣA類と同じである。

〔坏Ⅴ類〕　平底風丸底のもので外傾気味にややきつく立ち上がる。段等の屈曲はない。形態からA・Bに分けた。

ⅤA類は口縁部がそのまま外傾する。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部～底部がヘラケズリである。調整の主体はヘラケズリでヨコナデは口唇頂部に部分的にみられるのみである。内面はヘラミガキ・黒色処理である。

ⅤB類は口縁部がやや直立気味に外反する。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部～底部がヘラケズリである。内面はヘラミガキ・黒色処理であるが、ヘラミガキが線状的で雑な感がある。

〔坏Ⅵ類〕　平底のものである。口縁部が欠損するが体部下端から外傾気味に立ち上がる。段等の屈曲はない。器面調整は摩滅のため全体は不明であるが外面で上部にヨコナデ、下端にヘラケズリが確認される。内面はヘラミガキ・黒色処理である。

〔坏Ⅶ類〕　小破片資料で底部が欠損する。丸底のもので口縁部にかけて円弧状に立ち上がる。口縁部と体部の境が稜となり口縁部は短く直立気味に外反する。器面調整は外面で口縁部がヨコナデで体部がヘラケズリ、内面はヨコナデである。内面調整の違いとともに胎土も黄橙色で他の類と相違がみられる。

高坏＝脚部の小破片資料である。方格の透かし孔をもつが全容は不明である。

蓋＝図示資料は1点である。口縁端部が断面三角形を呈する。天井部は口縁部から丸く立ち上がり偏平となっている。ツマミ部は欠損している。器面調整は内外面ともヘラミガキ・黒色処理である。

鉢＝図示資料は5点である。器高が低く、外傾気味に立ち上がり、口縁部付近の変化が小さいものを鉢とした。器形等から4つに分類ができる。

〔鉢Ⅰ類〕　平底のもので、体部は外傾気味に立ち上がり、口縁部はくの字に外頽する。口縁部と体部の境にゆるい段が巡る。器面調整は外面で口縁部がヨコナデで体部は摩滅のため不明、内面は口縁部がヨコナデで体部はヘラナデ・ナデである。底部に木葉痕がみられる。

〔鉢Ⅱ類〕　底部が欠損するが丸底と考えられる。底部から体部にかけ丸く立ち上がり、口縁部はゆるく外反する。器高が低く椀形を呈する。内面には口縁部と体部の境に段状の稜が巡る。器面調整は外面で口縁部がヨコナデで体部がハケメ・ナデ・ヘラケズリ、内面で口縁部がヨコナデで体部はヘラナデである。

〔鉢Ⅲ類〕　体部下部が欠損する。体部は丸みをもち内弯気味に立ち上がり、口縁部は短く直立し断面三角形となっている。器面調整は外面で口縁部がヨコナデで体部がナデである。内面は摩滅のため不明である。

〔鉢Ⅳ類〕　体部下部が欠損する。体部はゆるく内弯気味に立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。器面調整は外面で口縁部がヨコナデで体部はナデ、内面はナデである。

甕＝図示資料は5点である。すべて欠損資料で全容を知り得るものはない。器形等から3つに分類ができる。

〔甕Ⅰ類〕　口縁部がくの字状に外反する。頸部に段をもつもの(A)と段のないもの(B)がある。(A)の有段のものは大形で最大幅は体部にある。器面調整は外面で口縁部がヨコナデで体部はナデ・ハケメで、内面は口縁部がヨコナデで体部はナデである。(B)の無段のものは中形で肩部に張りがなくなで肩である。器面調整は外面で口縁部がヨコナデで体部はハケメ、内面は口縁部がヨコナデで体部はヘラナデである。

〔甕Ⅱ類〕　口縁部がきつく外反し口唇部が外方へ突出し、体部はゆるく内弯気味に立ち上がる。最大幅は口縁部にある。器面調整は外面で口縁部がヨコナデで体部はナデ、内面は口縁部がヨコナデで体部は摩滅のため不明である。

〔甕Ⅲ類〕　体部は円筒状に立ち上がり、口縁部はゆるく短く外反する。最大幅は口縁部にある。器面調整は外面で口縁部がヨコナデで体部はハケメ・ヘラケズリ、内面は口縁部がヨコナデで体部は摩滅のため不明である。

3）須恵器

確認した器種には坏・蓋・鉢・壺・甕・瓶があるが出土量は少なく、多くは破片資料である。

坏＝図示資料は6点である。器形等から4つに分類ができる。

〔坏Ⅰ類〕　丸底のもので口縁部と体部の境に段が巡る。段が器高の中位付近につく小形のもの(A)と、下端につくやや大形のもの(B)がある。口縁部は外傾気味に立ち上がる。外面体部は回転ヘラケズリ調整である。底部切り離し技法は不明である。

〔坏Ⅱ類〕　平底のもので口縁部と体部の境に段が巡る。段は器高の中位付近につく。口縁部はほぼ直立気味に立ち上がる。外面の底部から体部は回転ヘラケズリ調整である。底部切り離し技法は不明である。

〔坏Ⅲ類〕　平底のもので、体部は外方へ内弯気味に立ち上がり口縁上部が内弯する。底部切り離し技法は不明で内外面ともロクロ調整である。

〔坏Ⅳ類〕　口縁部・体部の破片資料である。外傾気味に立ち上がるもので、平底と判断される。残存部はロクロ調整である。

鉢＝図示資料は2点である。小形(A)と大形(B)のものがある。(A)は底部が欠損するが体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は短く外方に屈曲する。残存部はロクロ調整である。(B)は平底で外傾気味に立ち上がる。口唇上部は平坦になっている。内外面ともロクロ調整で外面下部には手持ちヘラケズリがみられる。

蓋＝図示資料は4点である。ほぼ全容を知り得るものは1点で他は破片資料である。器形から2つに分類できる。

〔蓋Ⅰ類〕　内面にカエリをもつ。天井中央部が欠損しツマミ部は不明である。器高が低く偏平である。口縁端部はゆるく丸くおさまる。カエリ部は短く断面三角形状を呈する。ロクロ調整のみが確認される。

〔蓋Ⅱ類〕　カエリをもたないもので、口縁部の形態から3種（a・b・c）に細分される。(a)は口縁端部が平縁となる。器高が低く全体的に偏平である。ツマミ部は中央部にやや低い凸部をもつリング状である。天井部外面に回転ヘラケズリが施される。(b)は口縁端部下方が平坦面で、外面上部に断面三角形の突起状の高まりをもち周縁帯の口縁部をもつ。器高があり台形状である。ツマミ部は欠損している。天井上部には回転ヘラケズリが施される。(c)は口縁部付近の破片資料である。口縁端下部が平坦で、口唇部からきつく立ち上がり断面三角形を呈する。ロクロ調整のみが確認される。

壺＝図示資料は1点である。長頸壺の頸の部分である。外面中央部に2条のゆるい沈線が巡る。

甕＝図示資料は4点である。すべて破片資料で、口縁部・体部各2点である。口縁端部が知られるものは端部が上下方に断面三角形状に突き出し周縁帯となっている。下部に沈線が1条巡っており、上下方にゆるい波状沈線がみられる。他の1点は沈線と隆帯が対となり上方に波状沈線が巡る。体部資料のものは外面に平行及び格子のタタキ痕跡、内面にはややくずれた同心円のオサエ痕跡がみられる。

瓶＝口縁部の破片資料である。平瓶ないし提瓶の口縁部と考えられる。外傾気味にラッパ状に開く。外面には二条の沈線が巡る。

4）土製品

種類として土玉と羽口がある。

土玉＝1点ある。球体を上下から潰した形をもつ。高さ14㎜、幅16㎜、重さ3.5gで径2㎜の孔が中心部に穿たれている。上下部は摩滅しているが他はミガキがみられる。SI1692出土である。

羽口＝小破片を含め十数点出土している。全体を知り得るものはなく端部が確認されるものが2点ある。ラッパ状に開くものと丸くおさまるものがある。両資料とも端部は融解している。SI1696・1697、SK1717・1726・1727・

1742 から出土している。

5）金属製品

破片及び錆びのため種類が特定できないものが多い。確認できたものには刀子と鏃がある。

刀子＝図示資料は5点である。全体を知り得るものはない。刀身部が確認できるものはすべて平棟平造りである。茎及び把はばきが確認できるものが2点ある。SI1694・1697、SD1716、SK1747 から出土している。

鏃＝図示資料は4点である。鉾とも考えられたが先端部が平端になるものが2点あり鏃と判断した。断面は一辺4～5㎜の四角形を呈する。鍛造品である。SI1697、SK1718・1747 から出土している。

6）石製品

砥石＝図示資料は3点である。欠損部があるが本来直方体の短冊形と考えられる。砥面が一面・二面・全面とさまざまで、硬度も軟質・硬質のものがある。砥面に研磨溝や抉りによる円錐状の凹面がみられるもある。SI1697 出土である。

7）木製品

楯＝竪楯である。上端部のみの欠損品であるが台木のもので上・側面は面取りがなされている。櫛歯は1㎜程の間隔で切り込まれている。SK1701 出土である。

8）動物遺体

貝殻＝SK1701 底面部でカラス貝の殻が出土している。

9）その他

鉄滓＝1～3㎝大のものである。出土量に差はあるが、検出したほとんどの遺構から出土している。

2．出土した土師器・須恵器について

土師器は坏・高坏・蓋・鉢・甕の5器種が確認された。製作に際しすべてロクロ不使用である。ここでは坏のみに着目し類例等をみてみたい。坏は形態から大きく7類（Ⅰ～Ⅶ）に分類し、調整・法量値からも各類を細分した。内面調整はⅦ類を除きすべてヘラミガキ・黒色処理（内黒）である。

Ⅰ・Ⅱ類の土器は量的に最も多く、外器面に段が巡るもの（明確な段とはならず稜・沈線帯・凹線的なものがあるが強い変曲線が認められ大きく段とした）である。底部はⅠ類が丸底、Ⅱ類が平底風丸底である。口縁部は内弯・外傾・外反の立ち上がりが認められるが外類及び外反の形態はおしなべて緩いもので、内弯する器種を主として器形は全体的に丸く円弧状である。段は外器面中位に位置するものがほとんどである。器面調整は外面で口縁部がヨコナデで体部～底部がヘラケズリ、内面は内黒である。ⅠA類には外面にも黒色処理されるものがある。ⅠA1・C・E・F類は他の類に較べ小振りである。ⅠB・ⅡB類は段の位置・調整に違いがみられた。これらⅠ・Ⅱ類の坏はⅡB類を除き郡山遺跡の各遺構から普遍的に出土している土器類である。ⅡB類に類似する坏は色麻町色麻古墳群の坏AⅠ3類がある。口縁部外面がヨコナデ調整で段下部が外方へ張り出すという違いはあるが法量値を含め類似している。また、名取市清水遺跡の第Ⅶ群土器の坏Ⅰ類のaにも類似する。無段のものではあるが法量値を含め器形的に極めて類似しており、ⅡB類の坏は段の有無・位置・形状から前出的なものかと判断される。

Ⅲ類は口縁部と体部の境が丸く屈曲し底部は丸底である。ⅢA類は口縁部がほぼ直立している。当遺跡第24次調査 SI260 住居跡・SB311 掘立柱建物跡から類似する坏が出土している。口縁部と体部の境は段となり内面はヨコナデである。関東系の土器と考えられるものである。当類は内面調整が内黒であり、器形的踏襲の中で在地化したものかと考えられる。ⅢB類はやや大型のもので口縁部が緩く立ち上がる。調整は内外面ともヘラミガキ・黒色処理（両黒）されている。盤状で蓋とも考えられる。

Ⅳ類は内弯気味に円弧状に丸く立ち上がる。調整は両黒で他の類に較べて作りが丁寧で器面には光沢がある。鋼鉢を模したものであろうか。ⅣA類は蓋の可能性もある。

Ⅴ類は平底風丸底のもので段等の屈曲はない。内面はややきつく立ち上がる。ヘラケズリ調整のためか器形的には角張った感がある。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部～底部がヘラケズリ、内面は内黒である。口縁部となるヨコナデ部分が Ⅰ～Ⅲ類に較べ小さく、全面ヘラケズリ調整のようにみられ系統・出自等と他の類と相違が感じられる。類似するものとして色麻古墳群坏 A Ⅱ・A Ⅲ 2 類がある。A Ⅱ類は調整・法量ともⅤA 類に極めて類似している。A Ⅲ 2 類は口縁部外面に稜が形成され、口縁部が短く外反するものである。報文では器形的特徴からみて関東地方の系統に属するものであるが、ヘラミガキ・黒色処理という在地の技法がみられ、両系統の折衷の結果生じた土器の可能性があるとしている。V B 類は口縁部が直立気味に外反するが内面が対応せずに立ち上がっている。内面は内黒であるが他の土器に較べて線状的で雑である特徴がある。

Ⅵ類は口縁部付近が欠損するが唯一平底となる坏である。器面調整は外面で口縁部付近にヨコナデ、体部下端にヘラケズリがみられる。内面は内黒である。当遺跡では平底の坏の出土は稀であるが、第107次調査 SX1616 から須恵器・瓦とともに類似する坏が出土している。

Ⅶ類は口縁部が短く外反する丸底のもので、内面がナデ調整となる特徴をもつ。当遺跡第 7 次調査 SD35 溝跡より同様の特徴をもつ坏類があり、Ⅰc 類が器形的にも特に類似する。その他、清水遺跡（第Ⅴ群土器）・色麻古墳群（坏 B Ⅱ類）・志波姫町御駒堂遺跡（第 1 群土器）等からも確認例がある。このような特徴をもつ土器は関東地方の土師器編年の鬼高式終末～真間式初頭の坏に類例が認められる。当資料は小破片で詳細は不明であるが、東北地方在来の土器とは出自等相違をもつ関東系の土器と判断される。

須恵器は坏・蓋・鉢・瓶・甕・瓶の 6 器種が確認された。ここでは坏及び蓋の類例等をみてみたい。

坏は形態から 4 類（Ⅰ～Ⅳ）に分類した。底部の切り離し技法はすべて不明である。Ⅰ・Ⅱ類の坏は外器面に段が巡るもので、Ⅰ類が丸底、Ⅱ類が平底となる。Ⅰ類は底部がやや偏平な丸底で段が器高の中位付近と下端部のものがあり口縁部は外傾気味できつく立ち上がる。全体的に土師器坏Ⅰ A 1 類に相似形である。Ⅱ類は小振りのもので口縁部が直立気味である。両類とも段から下部は回転ヘラケズリ調整である。類似するものとして清水遺跡の第Ⅴ群土器、当遺跡第43次調査 SD35 溝跡・第35次調査 SI412 住居跡、蔵王町塩沢北遺跡第 1 号住居跡出土の坏がある。Ⅲ類は口縁部がまるく内弯し、底部が小さく平底で、内外面ロクロ調整のものである。類例は管見の限り確認できない。Ⅳ類は破片資料であるが外傾気味に立ち上がる平底の坏と判断される。

蓋は 2 類に分けた。内面にカエリのあるものをⅠ類、カエリのないものがⅡ類である。Ⅰ類は天井部が欠損しツマミ部が不明である。全体的に偏平でカエリは短い。ロクロ調整のみ確認される。郡山市蔵山窯跡・当遺跡から同類のものがあるが、当類はカエリの部分が弱く退化的である。Ⅱa 類は口縁部が平縁でツマミ部の中央部が凹面となるリング状である。全体的に偏平で外面は回転ヘラケズリ調整である。大和町鳥屋窯跡に類似するのものがある。Ⅱb 類は形態が台形状でツマミ部が欠損している。口縁部上部が三角形状に突起し周縁帯となる。Ⅱc 類は口縁端部の破片資料である。下部が平坦で三角形状である。b・c 類とも類似資料は管見の限り確認されない。

このように土師器・須恵器を坏と蓋のみであるがその特徴を抽出し、他遺跡出土の類似資料と比較検討を行ってみた。各遺跡での年代観から、全体としては 7 世紀後半から 8 世紀前半代の土器類と考えられる。他の器種も共伴関係等から同様の年代と想定される。今回の調査地点は後世の削平・攪乱のため遺構の遺存状態が必ずしも良好でなく、多くの遺構を検出したにもかかわらず住居跡等からの一括出土資料が少なかった。しかし、その中で SI1696・1697 住居跡では若干の床面共伴資料が確認された。SI1696 では土師器坏Ⅰ A 1 類と土師器鉢Ⅲ類、SI1697 では土師器坏Ⅵ類と土師器鉢Ⅰ類があり、坏類を中心にみて各鉢類が補塡資料となる。尚、SI1697 は平底の土師器坏等の出土からみて SI1696 より時期的に降るものと判断される。

Ⅶ. 総括とまとめ

1．住居跡について

竪穴式の住居跡を８軒確認した。平面形はすべて隅丸方形である。規模は一辺６ｍ内外のものと、４ｍ程の大小の２形態が認められた。住居の軸方向は細かくみると様々であるが、西辺を基準にして大きく真北方向（N-0～13°-E）のもの４軒、東へ30度程傾く（N-33～37°-E）もの２軒、西へ傾く（N-7～21°-W）もの２軒がある。柱穴はSI1729を除く各住居跡で確認されている。住居の規模にかかわらず柱穴は住居隅対角線上に位置しており４本柱と判断される。カマドは削平のため２軒のみの確認である。煙り出しが外方へ突き出すもので、住居北辺と西辺に造られている。床面上での施設は全く確認されない。残存状況の良好な住居跡では貼床が確認され、貼床下面には焼土が入ったピットが数多くみられた。出土遺物は全体を知り得るものも少なく、床面上での確実な共伴関係を示す遺物はSI1696・1697のみにとどまる。なお、SI1729は西壁にカマドを有するが平面形状や柱穴が確認されない等、他のものと大きな違いがみられ住居跡となるものか判然としない。住居跡の重複関係はⅠ・Ⅱ区両方で確認されるが、住居の軸方向が真北から東へ30度程傾くグループが他のものに切られており、時間的に古い段階のものと判断される。

2．掘立柱建物跡について

Ⅰ区内で４棟確認した。調査区内で建物跡が完結するものは２棟である。SB1723が２間×３間の南北棟の建物跡で、SB1733は１間×２間の東西棟として確認した。SB1733には雨落ち溝と判断したSD1716が東妻側に位置する。溝はコの字に確認されたが、本来建物跡を全周していたものと考えられ、上屋は寄棟ないし入母屋の構造と想定される。４棟の建物跡の方向はN-2～6°-Eとなり、ほぼ真北方向を向いている。柱穴はSB1723・1724が径40cm前後、SB1691・1733が径80cm程を計る。当遺跡官衙中枢部の建物跡柱穴に較べると規模が小さい特徴がみられる。なお、SB1733の柱穴は深さ最大で80cmを計り、他に較べて極めて深く柱痕跡も径20cm程を計る。当地区における中心的な建物跡と考えられる。建物跡の直接の重複関係はみられないが、SB1723はSD1716の底面で南妻の柱穴を確認している。このことからSB1733よりは時間的に後出するものと判断される。また、SB1723とSB1724は梁ラインが、SB1691とSB1733は桁ラインが一直線上に通っている。同時期存在の確証はないが、同一基軸での配置と判断され大きな時期差はないものと思われる。柱穴は確認された建物跡以外にもⅠ・Ⅱ区で数多く検出されており、推定復元されたもの以外にも多くの建物跡があったものと考えられる。柱穴は柱列状となるもの・柱穴平面形が方形のものをみると、すべてではないが列方向・南北辺の向きが大きく真北を向くものと真北から東へ30度程傾くものの２種がみられる。特にⅠ区では真北方向のもの、Ⅱ区では真北から東へ30度程傾くものが観取される。

3．溝跡について

計14条確認した。調査区を東西・南北方向に単一で直線的に延びるもの、小溝状で数条の溝が並走し群をもつものがある。SD1698はⅠ区を南北方向に縦走するやや規模の大きいもので、堆積状況から凵開した溝跡であることが確認される。西辺の方向がN-4°-Eとほぼ真北を向く。SB1733の柱穴を切っており、建物群より時間的に新しい。なお、Ⅱ区北半に東西方向に直線的に延びるSD1737がある。溝間は20m程の隔たりがあるが断面形状が似ており、断定はできないが一連の溝跡とも考えられ、L字形又は十字状となる区画の溝の可能性がある。Ⅱ区南半では上顎がやや小さく直線及びやや弧状に延びる小溝を９条検出している。方向・重複関係から、東西方向もの・南北方向のもの・その他の３グループに分けられる。東西と南北のグループには重複関係があり東西のものが新しい。SD1699には切られるが住居跡・土坑をすべて切っている。小溝はほぼ並行して延びており溝間は２～２.5m程である。これらの小溝群は小溝状遺構と称される畑跡に関する遺構と考えられる。Ⅱ区のみでの確認であるがⅠ区の削平状況を考えると北側にも広く分布していた可能性は高い。時期は平底の坏が出土しているSI1697より新しく、ロクロ使用の土師器が全く出土していない点からみて、奈良時代後半代のものと考えられる。

住居番号	平面形	規模	方向	備考
SI1692	隅丸方形	6.1×6～	N-2°-E	削平、柱穴4基、SI1693を切る
SI1693	隅丸正方形	4.2×4.2	N 37° E	削平、柱穴4基
SI1694	隅丸方形	5.1～×2.1～	N-10°-E	削平
SI1696	隅丸正方形	4×4.2	N-13°-E	北壁中央にカマド、柱穴4基、羽口、鉄滓
SI1697	隅丸方形	6.1×7.5	N 0° E	拡張有り、柱穴4基、羽口、鉄滓
SI1729	隅丸方形	(3.4×3.9)	N-7°-W	削平、柱穴不明、西壁中央にカマド、SI1743を切る、鉄滓
SI1741	隅丸方形	(6.3×5.4)	N-69°-E	削平、柱穴4基、SI1743を切る、鉄滓
SI1743	隅丸方形	6.1×5.5	N-33° E	削平、柱穴4基、鉄滓 (単位はm)

建物番号	桁行			梁行			方向		備考
	間数	柱間寸法	総長	間数	柱間寸法	総長	方位	向き	
SB1691	1～	218		2	202～226	428	N 4° E	東西？	
SB1723	3	164～196	537	2	197～205	405	N-5°-E	南北	SI1692・1693を切りSD1716に切られる
SB1724	1～	185		3	156～165	483	N-6°-E	南北？	SI1714に切られる
SB1733	2	565		1		1150	N-2°-E	東西	1×2間で確認

溝番号	断面図	規模	方向	備考
SD1698	逆台形	94×48×55	N 4° W	南北方向に延びる、SB1733を切る
SD1699	逆台形	59×31×29	N-15°-W	南北方向に延びる、SD1702・1704・1721・SK1718・1719を切る、鉄滓
SD1702	皿形	31×22×12		小溝、東－西方向、SI1696・SK1726・1739・SD1711・1712を切る、鉄滓
SD1703	方形	28×18×20		小溝、東南－西北方向、SD1713を切る
SD1704	逆台形	37×29×22		小溝、東－西方向、SI1696・1697・SK1701・1738・SD1711・1713を切る、鉄滓
SD1709	皿形	29×24× 6		小溝、東－西方向、鉄滓
SD1711	皿形	36×26×10		小溝、南－北方向、SK1726を切る、鉄滓
SD1712	皿形	35×28× 4		小溝、南－北方向、SK1701を切る、鉄滓
SD1713	皿形	33×29× 5		小溝、南－北方向、SI1697を切る、鉄滓
SI1716	皿形	64×32×20	N 1° E	コの字状で確認、SB1733の雨落ち溝？、SI1692・1693・SB1723を切る
SD1721	皿形	44×40×12		小溝、東－西方向、SI1743・SK1708・1747を切る、鉄滓
SD1722	皿形	29×25× 7		小溝、東－西方向
SD1732	皿形	30×15×11		IV層面確認
SD1737	逆台形	94×47×41	N 81° E	東西方向に直線的に延びる、鉄滓

土坑番号	平面図	断面図	規模	備考
SK1701	隅丸長方形	逆台形	250×125×230	人為堆積、井戸跡？、木製品(櫛)・鉄滓・貝殻、礫・炭化物多量に出土
SK1706	円形	皿形	84× 82× 18	不整形
SK1707	長円形	皿形	100× 55× 20	鉄滓
SK1708	楕円形	逆台形	155× 75×100	不整形、SI1729・1743を切る、鉄滓
SK1714	円形	椀形	166×147× 65	人為堆積、焼土、炭化物粒多量に含まれる
SK1717	円形	逆台形	125×115× 95	SK1738を切る、鉄滓・羽口
SK1718	楕円形	皿形	140×115× 30	不整形、SK1719を切る、炭化物を含む、鉄滓・鉄製品
SK1719	方形	皿形	180～×160×12	不整形、炭化物を含む、鉄滓
SK1726	楕円形	逆台形	140×110×100	不整形、鉄滓・羽口
SK1727	隅丸方形	方形	120× 65× 40	鉄滓・羽口・鉄製品
SK1728	長方形	皿形	260× 65× 15	不整形
SK1731	長円形	逆台形	108×70～×20	不整形
SK1734	円形	皿形	84× 84× 7	焼土・炭化物を含む
SK1736	円形	皿形	120×80～×25	不整形
SK1738	隅丸方形	逆台形	130×100× 40	鉄滓・鉄製品
SK1739	楕円形	皿形	100× 60× 20	不整形、鉄滓
SK1742	円形	逆台形	75× 70×105	鉄滓・羽口
SK1744	隅丸方形	逆台形	75× 55× 40	炭化物・焼土を含む
SK1746	楕円形	逆台形	95× 70× 20	
SK1747	楕円形	皿形	190×130× 23	不整形、鉄滓・鉄製品
SK1748	円形	方形	52× 42×120	不整形、鉄滓 (単位はcm)

表1　発見遺構一覧

Ⅰ区のⅣ層面では北西－南東方向に延びる溝跡を１条確認した。出土遺物は確認されないが上層となるⅢ層には弥生土器が包含されており、溝跡の時期は弥生時代、桝形囲式期と思われる。性格は不明である。

４．土坑について

計21基確認した。１区では４基のみの確認で散在しているが、Ⅱ区では調査区中央部に集中している。平面形は円形・方形を基調とし様々な形態がみられる。底面はやや凹凸した平坦面であるが、段を有するものが３基確認される。大半の遺構が性格不明であるが、SK1701は形態・状況から井戸跡の可能性がある。平面形は隅丸の長方形で長軸2.5m、短軸1.25m、深さ最大で2.3mを計る細長く深いものである。底面は東側へ傾斜をもつ段状で最下部が円形のピット状となる。堆積土はレンズ状ではあるが人為的に埋め戻されている。SK1714は堆積土から判断して短時に埋め戻されている。

５．遺構群について

遺構は前述のように住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑等が確認されている。遺構に伴う土器類は比較検討の中で大きく７世紀後半～８世紀前半代の遺物群と判断される。なお、SI1697・SK1714・1717は土器類の特徴からみて８世紀前半代に位置づけられよう。住居跡・建物跡・溝跡を重複・方向・配置関係から整理してみると、Ⅰ区では住居跡群→建物跡群→溝跡という大きな変遷がみられる。基軸が真北から30度程東へ傾くSI1693が古段階となり、ほぼ真北を向くSD1698が新段階となる。なお、重複関係がなく単一で存在する遺構もあることから、変遷段階ごとに遺構群としての構成は必ずしも明確ではない。Ⅱ区では住居跡群→小溝跡群となる大きな変遷が確認でき、住居跡ではⅠ区同様に真北から30度程東へ傾くSI1743が全ての遺構にも切られ古段階となる。

郡山遺跡ではこれまでの調査から大きく６段階の遺構変遷が確認されている。当調査区の遺構群はこの中での第３・第４段階に位置付けられよう。第３段階はⅠ期官衙造営期で７世紀後半～末葉の時期、第４段階がⅡ期官衙造営・寺院造営期で７世紀末葉～８世紀初頭の時期が考えられている。なお、Ⅰ期とⅡ期官衙群には造営基準方向に大きな違いがみられる。方向性に着目すればSI1693・1743の住居跡２軒とⅡ区検出の柱列等が第３段階に、その他の遺構が第４段階に比定される。第３段階の遺構群は調査区内に散在する状況であるが、第４段階の遺構群は密集した状況である。特にⅠ区では連続する遺構の重複関係がみられ、短期間における各遺構の変遷がみられ「場」としての性格の変容が注意される。最終的には小溝群が分布する状況となる。

当地点はⅠ期・Ⅱ期官衙の南西外域に位置する。Ⅱ期官衙南外域には「南方官衙地区」「寺院西方建物群」と称される大形の建物跡によって構成される地区がある。同じ南外域には位置するが遺構の規模等からみて、それらの地区とは性格の異なった一画を形成していたものと考えられる。なお、当調査では遺構内外から多量の鉄滓が出土している。関連する遺構は未確認であるが、鍛冶生産に関係する一画であった可能性が想定される。各段階での遺構群はⅠ・Ⅱ期官衙の造営基準方向に沿っており、官衙と密接な関連性をもつ遺構により構成された一画と判断され、広義の官衙関連地区と考えられるものである。

○まとめ

今回の調査地点は郡山遺跡の南西部にあたり、Ⅱ期官衙南西隅から西方約250mに位置する。発見遺構には住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑等がある。時期的には７世紀後半～８世紀前半の遺構群である。住居跡・掘立柱建物跡・溝跡はⅠ期・Ⅱ期官衙造営基準方向に沿っており大きく２時期に分けられ、Ⅱ期官衙段階の遺構はさらに変遷が確認される。遺構群の性格は明らかに出来なかったが、位置・規模等から官衙を構成する中心的な遺構とは考えられず、官衙関連のものと考えられた。さらに、官衙・寺院の廃絶後には畑跡と考えられる小溝群が広範囲に分布するものと考えられ、官衙の廃絶とともに場の使われ方が大きく変化したことが窺われる。

なお、本地区は造営された官衙・寺院の規制を受けて計画的に形成された一画と考えられたが、このような関連

諸施設や周辺居住域が官衙周辺にどのような計画性をもって配置されていったのか、今後の周辺地区の調査成果をまって検討してゆきたい。

参考文献

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第８輯　東北史学会

氏家和典（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸瓦杯をめぐって」柏倉亮吉教授還暦記念論文集

伊田茂司（1989）：「陸奥国における奈良時代土師器の地域性について」『歴史』第72輯　東北史学会

東北学院大学考古学研究部（1975）：「鳥屋窯跡群三角山南地区発掘調査報告書」『遠故』９号

仙台市教育委員会（1980）：「郡山遺跡発掘調査概報－年報１－」『仙台市文化財調査報告書』第23集

仙台市教育委員会（1981）：「郡山遺跡Ⅰ－昭和55年度発掘調査概報－」『仙台市文化財調査報告書』第29集
「郡山遺跡Ⅱ」第38集　「郡山遺跡Ⅲ」第46集　「郡山遺跡Ⅳ」第64集
「郡山遺跡Ⅴ」第74集　「郡山遺跡Ⅵ」第86集　「郡山遺跡Ⅶ」第96集
「郡山遺跡Ⅷ」第110集　「郡山遺跡Ⅸ」第124集　「郡山遺跡Ⅹ」第133集
「郡山遺跡Ⅺ」第146集　「郡山遺跡Ⅻ」第161集　「郡山遺跡XIII」第169集
（1996）「郡山遺跡XIV」第178集　「郡山遺跡XV」第194集　「郡山遺跡XVI」第210集

仙台市教育委員会（1990）：「郡山遺跡－第84次・85次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第146集

仙台市教育委員会（1992）：「郡山遺跡－第65次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第156集

仙台市教育委員会（1982）：「栗遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第43集

仙台市教育委員会（1991）：「六反田遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第34集

仙台市教育委員会（1984）：「六反田遺跡Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書』第72集

仙台市教育委員会（1987）：「六反田遺跡Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書』第102集

仙台市教育委員会（1987）：「元袋Ⅲ遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第103集

宮城県教育委員会（1980）：「塩沢北遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」「宮城県文化財調査報告書」第69集

宮城県教育委員会（1981）：「清水遺跡－東北新幹線遺関係遺跡調査報告書Ⅳ」「宮城県文化財調査報告書」第77集

宮城県教育委員会（1982）：「御駒堂遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ」『宮城県文化財調査報告書』第83集

宮城県教育委員会（1983）：「色麻古墳群－宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書（昭和57年度分）」
『宮城県文化財調査報告書』第95集

宮城県教育委員会（1984）：「色麻古墳群－宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書（昭和58年度分）」
『宮城県文化財調査報告書』第100集

福島県教育委員会（1960）：「郡山市麓山窯跡調査報告」『福島県文化財調査報告書』第８集

写真図版

写真1　郡山遺跡航空写真

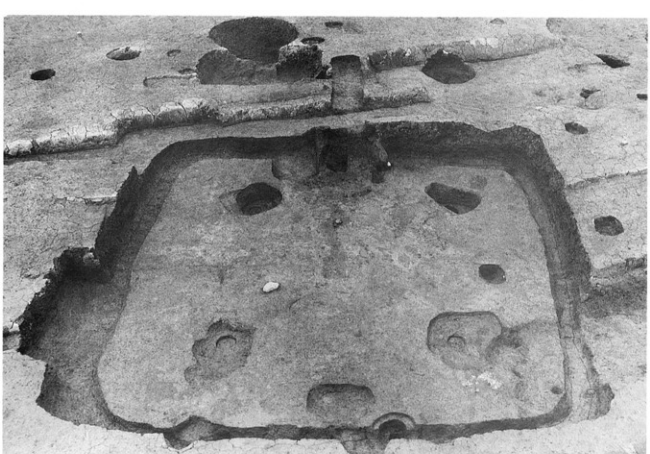


写真2　SI1696 住居跡全景（南→）

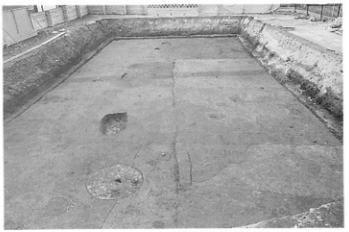


写真３　Ⅰ区遺構確認状況（東→）

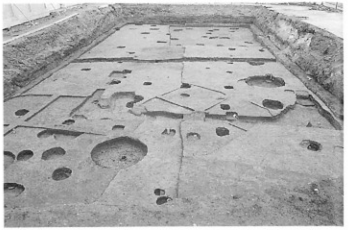


写真４　Ⅰ区発見遺跡全景（東→）

写真５　Ⅰ区発見遺構全景（西→）

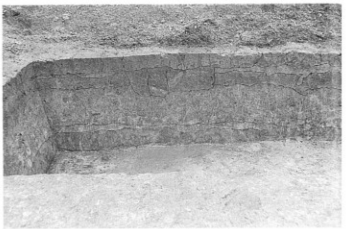


写真６　Ⅰ区西壁断面（東→）

写真７　Ⅰ区北壁断面（南→）

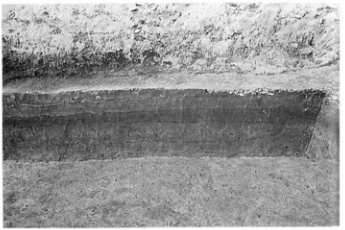


写真８　Ⅰ区北壁断面（南→）

写真９　SI1692 住居跡全景（南→）

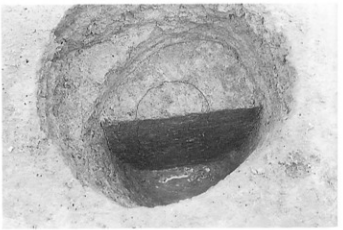


写真10　SI1692 住居跡ピット10土層断面（南→）

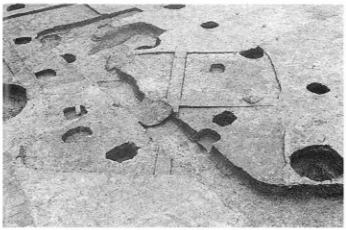


写真11　SI1693 住居跡全景（北東→）

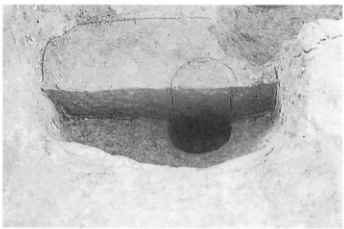


写真12　SI1693 住居跡ピット 2 土層土層断面（北西→）

写真13　SI1694 住居跡全景（北西→）

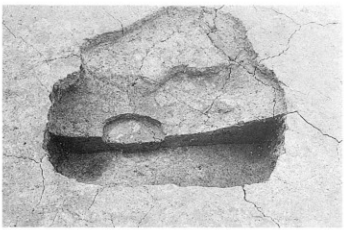


写真14　SB1691 掘立柱建物跡ピット 3 土層断面（東→）

写真15　SB1723 掘立柱建物跡全景（南→）

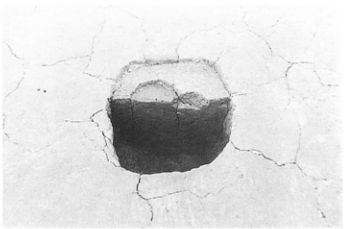


写真16　SB1723 掘立柱建物跡ピット38土層断面（南→）

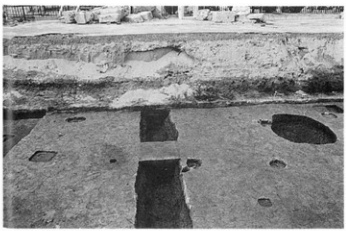


写真17　SB1724 掘立柱建物跡全景（南→）

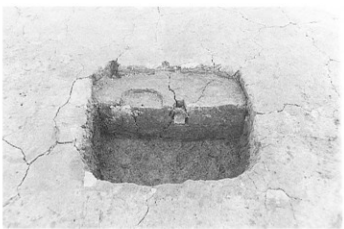


写真18　SB1724 掘立柱建物跡ピット26土層断面（南→）

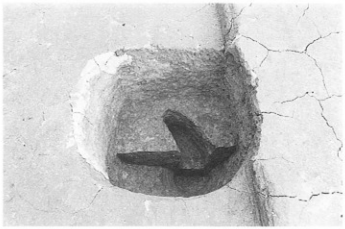


写真19　SB1733 掘立柱建物跡ピット16土層断面（西→）

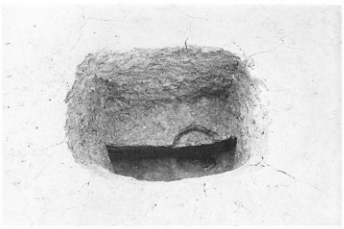


写真20　ピット12土層断面（A-1）（東→）

写真21　SD1698 溝跡全景（北→）

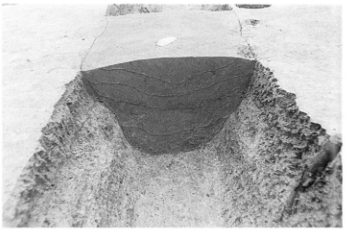


写真22　SD1698 溝跡土層断面（南→）

写真23　SD1716 溝跡全景（南→）

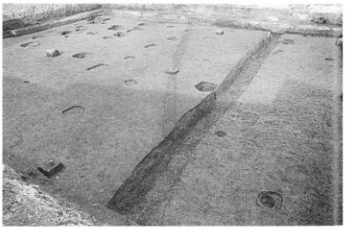


写真24　SD1732 溝跡検出状況（南→）

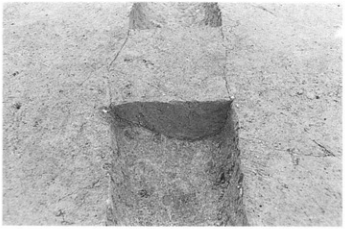


写真25　SD1732 溝跡土層断面（南→）

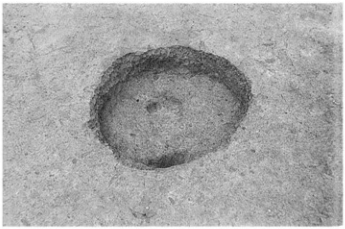


写真26　SK1706 土坑全景（南→）

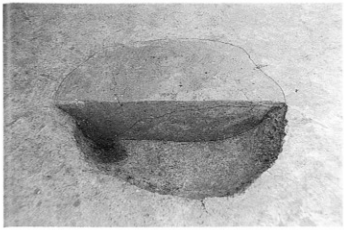


写真27　SK1706 土坑土層断面（東→）

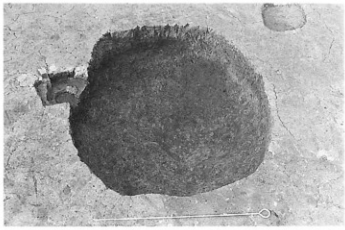


写真28　SK1714 土坑全景（南→）

写真29　SK1731 土坑土層断面（南→）

写真30　II区遺構確認状況（北東→）

写真31　II発見遺構全景（西→）

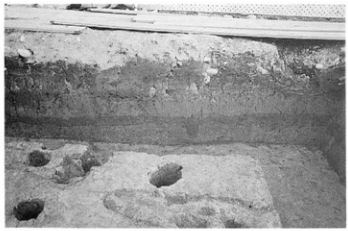


写真32　II区東壁断面（西→）

写真33　II区南壁断面（北→）

写真34　II区南壁断面（6ライン付近・北→）

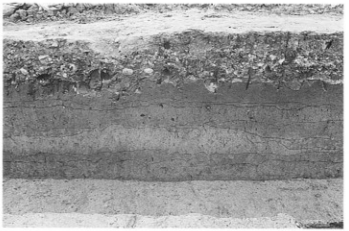


写真35　II区南壁断面（７ライン付近・北→）

写真36　II区中央部深掘り断面（南→）

写真37　SI1696 住居跡土層断面（南→）

写真38　SI1696 住居跡カマド全景（南→）

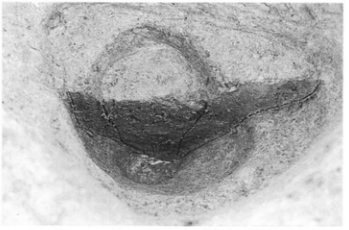


写真39　SI1696 住居跡ピット１土層断面（南→）

写真40　SI1697 住居跡床面検出状況（東→）

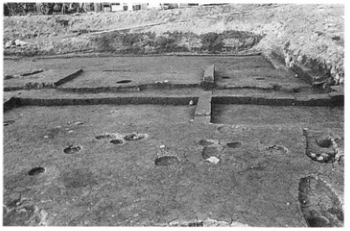


写真41　SI1697 住居跡土層断面（南→）

写真42　SI1697 住居跡床面出土遺物（西→）

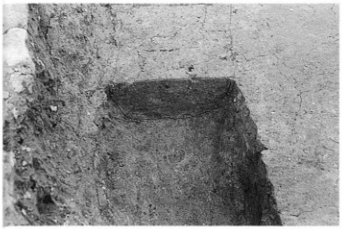


写真43　SI1697 住居跡 b 周溝土層断面（西→）

写真44　SI1697 住居跡 a 周溝土層断面（南→）

写真45　SI1729 住居跡カマド部土層断面（南→）

写真46　SI1729 住居跡カマド内遺物出土状況（南→）

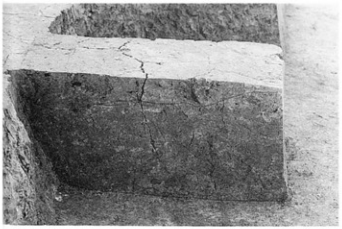


写真47　SI1741 住居跡土層断面（東→）

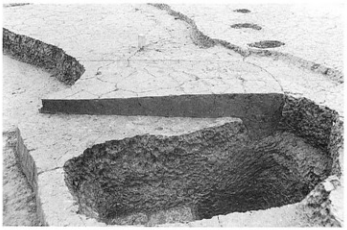


写真48　SI1743 住居跡土層断面（西→）

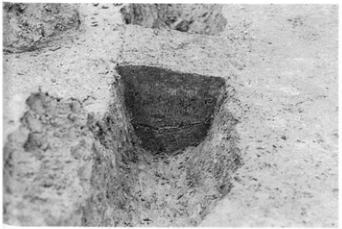


写真49　SI1743 住居跡周溝土層断面（東→）

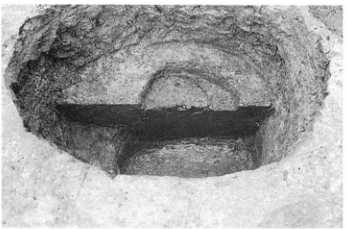


写真50　SI1743 住居跡ピット 1 土層断面（南東→）

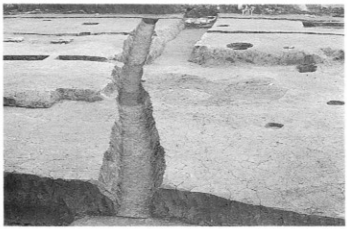


写真51　SD1699 溝跡全景（北→）

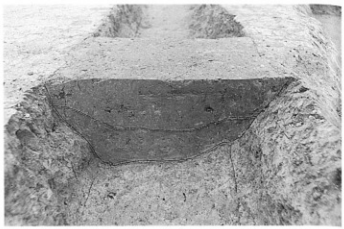


写真52　SD1699 溝跡土層断面（北→）

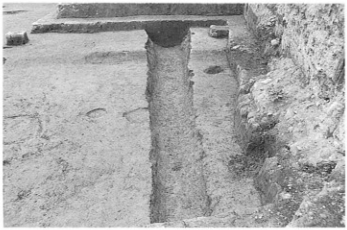


写真53　SD1737 溝跡全景（東→）

写真54　SD1737 溝跡土層断面（東→）

写真55　東西に延びる溝跡群全景（西→）

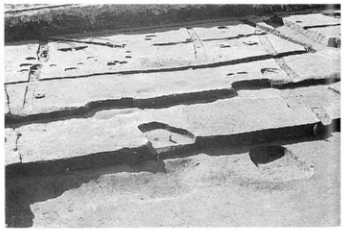


写真56　南北に延びる溝跡群全景（北→）

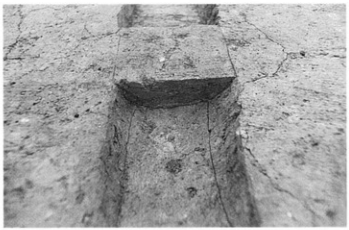


写真57　SD1702 溝跡土層断面（東→）

写真58　SD1703 溝跡土層断面（南東→）

写真59　SD1711 溝跡土層断面（南→）

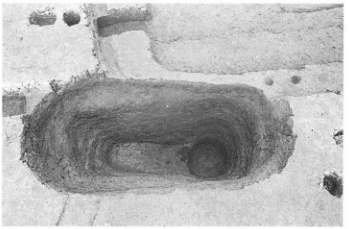


写真60　SK1701 土坑全景（南→）

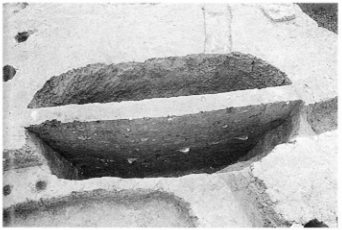


写真61　SK1701 土坑土層断面(北→)

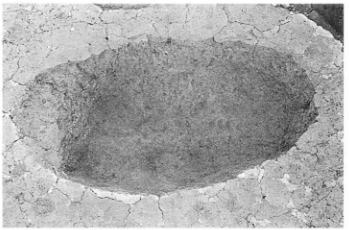


写真62　SK1707 土坑全景（北→）

写真63　SK1707 土坑遺物出土状況（西→）

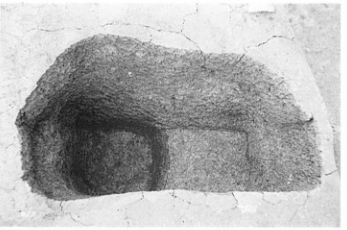


写真64　SK1708 土坑全景（南→）

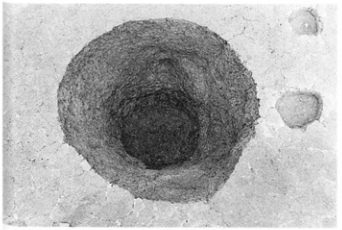


写真65　SK1717 土坑全景（南→）

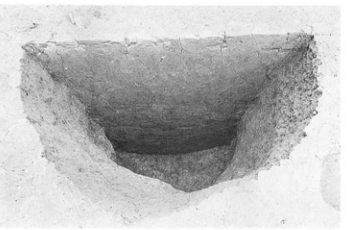


写真66　SK1717 土坑土層断面（南→）

写真67　SK1718 土坑全景（西→）

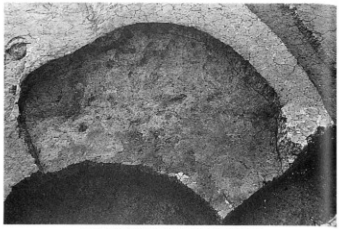


写真68　SK1719 土坑全景（東→）

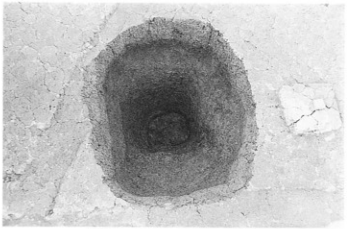


写真69　SK1726 土坑全景（南→）

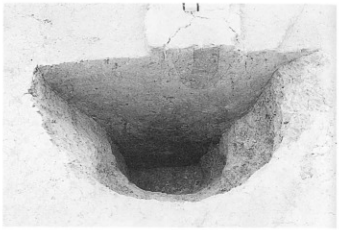


写真70　SK1726 土坑土層断面（北→）

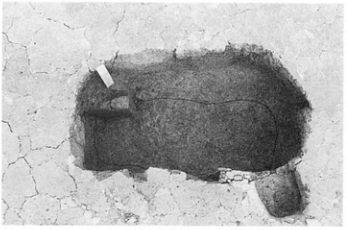


写真71　SK1727 土坑全景（西→）

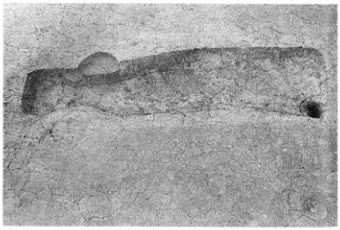


写真72　SK1728 土坑全景（東→）

写真73　SK1736 土坑土層断面（北→）

写真74　SK1738 土坑全景（南→）

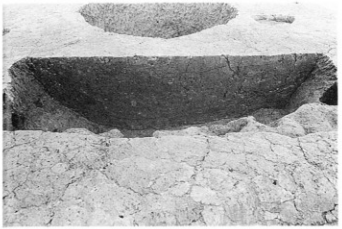


写真75　SK1738 土坑土層断面（南 →）

写真76　SK1739 土坑全景（東 →）

写真77　SK1742 土坑全景（南→）

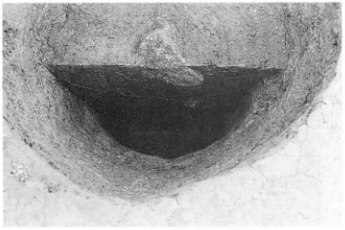


写真78　SK1742 土坑土層断面（南→）

写真79　SK1744 土坑全景（西 →）

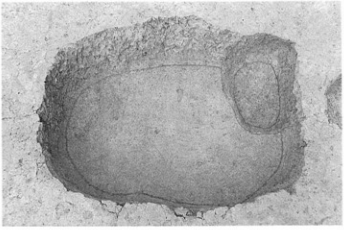


写真80　SK1746 土坑全景（東→）

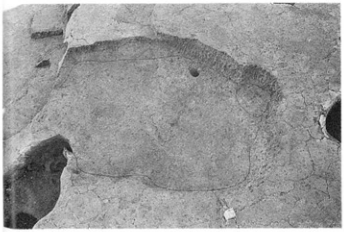


写真81　SK1747 土坑全景（西 →）

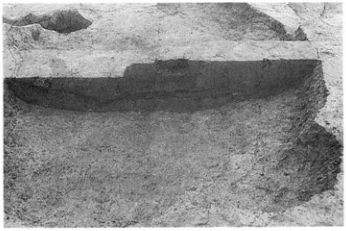
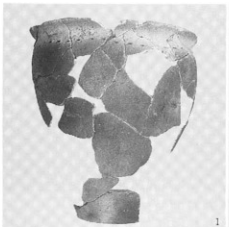
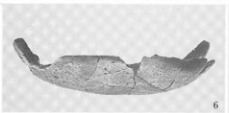
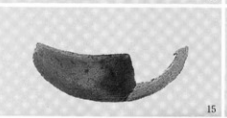
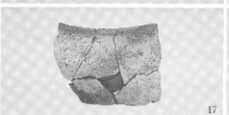


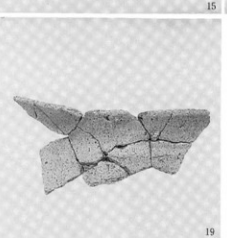
写真82　SK1747 土坑土層断面（南 →）





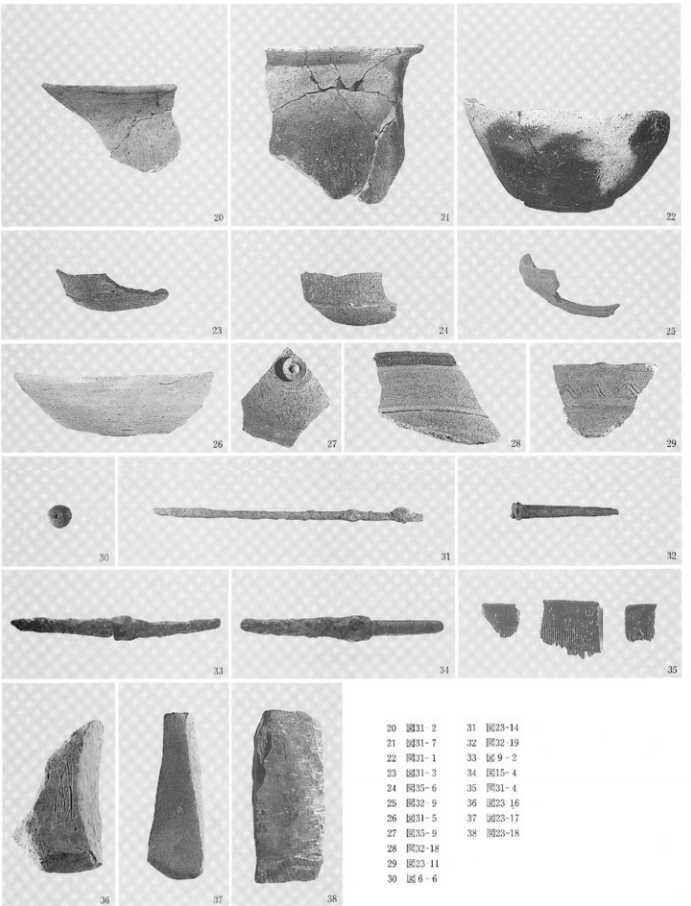






1　区35-1
2　同19-1
3　同19-2
4　区32-14
5　区35-4
6　同32-15
7　同32-16
8　区17-1
9　区31-6
10　同15-1
11　区35-5
12　区21-2
13　同32-17
14　区21-2
15　区19-4
16　同32-13
17　同19-3
18　区15-3
19　区19-5

写真83　出土遺物1



20　区31－2
21　区31－7
22　区31－1
23　区31－3
24　区35－6
25　区32－9
26　区31－5
27　区35－9
28　区32－18
29　区23－11
30　区6－6
31　区23－14
32　区32－19
33　区9－2
34　区15－4
35　区31－4
36　区23－16
37　区23－17
38　区23－18

写真84　出土遺物２

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき
書名	郡山遺跡
副書名	第112次調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第222集
編著者名	渡部弘美、三塚　靖
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目７－１　TEL 022-214-8893・8894
発行年月日	1997年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
郡山遺跡 （こおりやまいせき）	宮城県仙台市太白区 （みやぎけんせんだいしたいはくく） 郡山六丁目24-1他 （こおりやまろく）	04100	01003	38° 13′ 4″	140° 53′ 26″	19960909 ～19961211	636m²	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項
郡山遺跡	官衙跡	古墳 ～ 奈良	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝跡・土坑	土師器・須恵器 土製品・石製品	

仙台市文化財調査報告書第222集

郡　山　遺　跡

－第112次発掘調査報告書－

1997年３月

発行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目７－１

文化財課 022(214)8893

印刷　株式会社　東北プリント

仙台市青葉区立町24－24

TEL 263 1166